

『時雨の炬燵』成立考

——三代竹本綱太夫の添削活動について——

神津武男

はじめに

『時雨の炬燵』〔紙屋の段〕は、近松門左衛門作・享保五年（一七二〇）十月大坂道頓堀竹本座初演『心中天の網島』中之巻を原作とする作品であるが、直接に拠るものではない。その直接の典拠としては、近松半二作・安永七年（一七七八）四月大坂北の新地西の芝居初演『心中紙屋治兵衛』下の巻〔紙屋〕をさらに改作したものと説かれてきたのであるが、これは誤りである。

内山美樹子氏・桜井弘氏編『浄瑠璃素人講釈』^①の上巻「小春・治兵衛／時雨の炬燵 紙屋内の段」に、「心中紙屋治兵衛」の「紙屋内の段」について、次の指摘がある。

ただしこれは現行の「時雨の炬燵」とは詞章が異なり、近松原作の「紙屋内」に近いもの。現行の「天網島時雨炬燵」はむしろ「置土産今織上布」^②（菅専助作、安永六（一七七七）年）の「中の巻」に近い。

右の指摘のように、『時雨の炬燵』〔紙屋の段〕は、安永六年（一七七七）五月大坂北堀江市之側芝居初演『置土産今織上布』上の巻ノ切の改作である^②。しかるに近年、浄瑠璃本の内、殊に抜き本の諸本調査によって、『置土産今織上布』から現行『時雨の炬燵』へ至るまでの間に、

- ・最初に二代豊竹紋太夫、
- ・次に二代竹本綱太夫、

の各人による、ふたつの改作が存在したこと、が明らかとなった。そしてこゝろにち人形浄瑠璃文楽・義太夫節の現行曲として聴く『時雨の炬燵』は、

・最後に三代竹本綱太夫（前名・三代竹本紋太夫時代）、
よって完成されたものであることが明らかとなった。筆者が本稿を著す第一の目的は、『時雨の炬燵』の成立に至る過程を明らかにするため、である。加えて、三代竹本綱太夫の伝記には、後年の編纂物に派生する誤解がある。『時雨の炬燵』の原型とともに、江戸の「紋太夫」の名跡が——二代綱太夫を経て——、京都の三代綱太夫に譲られた、と推考される点について述べるのを第二の目的とする。

三代綱太夫が『時雨の炬燵』の改作を手掛けるのは、初代・二代の「綱太夫」に行われてきた添削活動（既成の作品を添削して、一幕物化して再演すること）を継承するものであること、しかるに添削内容に認められる彼の個性について述べることを、第三の目的とする。

一、三代竹本綱太夫の改名歴

論証の都合上、最初に三代綱太夫の伝記、殊に改名歴について確かめておきたい。天保七年（一八三六）春刊『三ヶ津太夫三味線人形改名師第附』^③は、当時の大坂・京・江戸の人形芝居に当時出勤したひとびとについて、誰の弟子であるか、改名歴がある場合その名前と順序をまとめた出版物（摺物・一枚摺）である。当該資料の、二段十四人目に、次の記述がある（次頁図一参照）。

紋太夫事
綱太夫改
故人猪ノ熊綱太夫門弟
竹本三綱翁

図一 『三ヶ津太夫三味線人形改名師第附』部分
 (『義太夫年表 近世篇』補訂篇より転載)



「故人猪ノ熊綱太夫門弟」とは、文化二年(一八〇五)八月に没した二代竹本綱太夫の弟子であるということの意味する。また頭の「紋太夫事・綱太夫改」とは、「紋太夫」を名乗っていたこと、そののちに「綱太夫」と改名したことを示している。「竹本三綱翁」とは、天保七年当時には引退している「三綱翁」と名乗ったことを示す³⁾。

参考のため12頁以下に、「三代竹本綱太夫出演年譜(稿)」をまとめた。当該年譜では、(1)前名「紋太夫」時代、(2)三代「綱太夫」時代、のそれぞれについて現在確認されるところの出演記録をまとめた。年譜に示す通り、紋太夫から三代綱太夫への改名は、従来知られていた文化四年正月大坂『会稽宮城野錦繡』初演興行でなく、前年文化三年(一八〇六)十一月二十日初日、京寺町道場芝居『花上野誉の石碑』興行での「志渡寺の段 切」が早い⁴⁾。ただし京・大坂どちらの番付でも「紋太夫事竹本綱太夫」と記していて、師の没後、一周忌の法要の済んだ段階で、師名を襲い京・大坂で披露したものと考えられる。三代綱太夫の前名が「紋太夫」であることは、改名披露の番付と『三ヶ津太夫三味線人形改名師第附』という、三代綱太夫存命中の同時代資料に確かめられることを強調したい。

次に、師・二代綱太夫の前名を確認する。文化三年(一八〇六)刊『竹本・豊竹/音曲高名集』⁵⁾は、三代野沢八兵衛の著書で、内容は故人や当時の名人たちの略伝と当人らの評判の残る曲名を掲げたものである。同書序文に「當時政太夫、八十路の齡にて、其音声さはやかに実此道の巨擘なり。予、幸ひに此時にあひ、政翁に随ひ、此座席をつとめ、折々普く古事をも尋ね」と

あつて、八兵衛が三代政太夫に取材して成ったことが知られる。三代政太夫と三代八兵衛は文化三年三月初日・江戸大薩摩座『双蝶々曲輪日記』興行で、紋下「太夫竹本政太夫」、八兵衛は「三味線」筆頭として同座していた。『音曲高名集』は、三代政太夫の江戸下り・江戸滞在中に、三代八兵衛が聞き取った伝承として貴重である。そして同書「二代目竹本綱太夫」項に、「前名浜太夫」「猪の熊甚兵衛と云」と記述がある。同書の伝える二代綱太夫の前名は「浜太夫」である。

二代・三代の綱太夫について各人の存命中の、同時代資料によって把握する改名歴を図に示すならば、

二代綱太夫 浜太夫↓綱太夫

三代綱太夫 紋太夫↓綱太夫↓三綱翁

となるが、四代竹本長登太夫編著『増補浄瑠璃大系図』⁶⁾は、二代綱太夫の前名を「紋太夫」と記し、三代綱太夫の前名を「浜太夫」と記している。『増補浄瑠璃大系図』は二代綱太夫と三代綱太夫の前名に関する情報を、取り違えて記載したものと判断せざるを得ない。

「後年の編纂物に派生する誤解がある」と述べたのはこの点で、『増補浄瑠璃大系図』の誤りは以後、早稲田大学演劇博物館編著『演劇百科大事典』(平凡社、一九六〇年)所載「竹本綱太夫」項、財団法人人形浄瑠璃因協会編『人形浄瑠璃系譜 太夫の部』(人形浄瑠璃因協会、一九六一年)、八代竹本綱太夫著『藝談でんでん虫』(布井書房、一九六四年)所載「綱太夫の代々」においても踏襲されている。

なお『増補浄瑠璃大系図』を擁護する点があるとするならば、三代綱太夫が前名「紋太夫」を名乗る前、おそらくその初名を「浜太夫」といったのだろうと考えられる点である。寛政七年(一七九五)五月刊『新改正 三ヶ津浄瑠璃・太夫方素人方・音曲座鋪角力 所付・実名付』に、師・二代綱太夫は、「太夫方」の「東」前頭一枚目に「京猪熊 綱渡甚兵衛」とみえるが、前掲『音曲高名集』に照らせば、四股名の一字目(人によって二文字)は太夫号(この場合、「綱」)で、その下の名は本名を記したものの(この場合、「甚兵衛」。「実名付」と謳う所以)と理解される。「太夫方」の「西」の前頭十四枚目の「同

(京。筆者註) 三条 浜側万吉」が、『増補浄瑠璃大系図』が三代綱太夫の住所地・本名と伝えるところの「三条橋東松の木町北側通称鉛屋万吉」と一致するので、「浜側万吉」を、寛政七年当時「浜」太夫と名乗る、のちの三代綱太夫そのひとと推定する^⑦。

右の推定を加えて、二代・三代の改名歴を示すと、

二代綱太夫 浜太夫↓綱太夫

三代綱太夫 浜太夫↓紋太夫↓綱太夫↓三綱翁

となる。

三代綱太夫が、師・二代綱太夫の前名を許されたのは、将来有望と見込まれたからこそその命名であったと理解し得よう。そしてふたりの綱太夫がともに「浜太夫」を初名としていたからこそ、四代竹本長登太夫編著『増補浄瑠璃大系図』は錯覚して、前名を取り違えたと解釈できるように考える。

なお三代綱太夫の没年・享年を伝えた資料はなく厳密には不明とすべきであるが、『三代竹本綱太夫出演年譜(稿)』では文政四年(一八二二)を、同人の還暦・六十歳と仮定した。仮定の理由は、京都東山・長楽寺に現存する顕彰碑「竹本綱太夫塚」の建立年である。

「竹本綱太夫塚」(正面)の、左面に「越前医員藤子徳識」の碑文があつて、三代綱太夫の功績を讃えている。右面の「文政四辛巳年建之」と、三代綱太夫の人生の具体的な関わりは見えにくいのであるが、碑文の中で三代綱太夫は「翁」と呼ばれることから、既に老境にあることは確かと考えられる。また「今歳為禱翁寿期」の文は、この年に当たって翁の長寿を祈るという意味かと考えてみる。そこで思い合わされるのが東京・浅草寺、浅草神社北側に現存する石碑である。これは初代竹本津賀太夫の還暦を記念して、文政五年(一八二二)に建立されたもの。三代綱太夫と初代津賀太夫はともに二代綱太夫の門弟であることから、初代津賀太夫は、前年の三代綱太夫建碑に做つたものと考えられよう。ならば建碑の動機は、初代津賀太夫のそれに同じく、「還暦」記念にあつた、と三代綱太夫の塚についても遡行させて捉えてみた、というものである。

以上、三代綱太夫の伝記について推定を重ねた。大方の御批正を仰ぎたい。

二、『時雨の炬燵』の諸本(一)その原拠

ここからは、『時雨の炬燵』の成立過程について述べる。参考のため、21頁以下に、『時雨の炬燵』関係諸作対校表」をまとめ、関係する六作品の該当する本文を対照した。なお当該対校表では、新しいものを上、古いものを下、に配置している。各作品の初演もしくは再演年次は次の通り。

- ⑥ 『心中天の網島』 享保五年(一七二〇)十二月初演
- ⑤ 『置土産今織上布』 安永六年(一七七七)五月初演
- ④ 『心中紙屋治兵衛』 安永七年(一七七八)四月初演
- ③ 『増補天網島』 寛政三年(一七九二)三月大坂再演以前
- ② 『増補紙屋治兵衛』 寛政九年(一七九七)三月大坂再演
- ① 『時雨の炬燵』 文化三年(一八〇六)江戸再演以前

初演の確定している④～⑥は措いて、①～③の再演年については後述する。ここで説明の都合上、『心中天の網島』の物語の、概略を述べる。

大坂天満の紙屋治兵衛は、妻おさんとの間に勘太郎・おすへの二人の子を設けるが、曾根崎新地・紀伊国屋抱えの遊女小春に迷い、心中とまで思い詰める。上の巻は、曾根崎新地の茶屋「河庄」が舞台で、治兵衛の兄・粉屋孫右衛門は武士に変装して小春に近付き、治兵衛と別れさせようと目論む。意外にも小春は治兵衛との別離に應じるが、これはおさんの依頼状に拠るものと知られ、孫右衛門は驚く。中の巻は、天満の「紙屋」が舞台。「小春が請け出される」との噂が、紙屋の親類に動揺を与える。もしや治兵衛が請け出す(女性を廓から買い取る)のではないかと、おさんの母が、孫右衛門を伴い来訪する。治兵衛は、誓紙(誓約書)を書いて安心させる。以上が「紙屋」の端場、以下が切で、改作の対象となる部分。おさんは治兵衛の詞から、自分の依頼状に従って夫と別れてくれた事実を知って、小春の本心を「別人と新しい関係を持つことを拒み、ひとり自害するのであろう」と見抜く。小春の命を救うためには治兵衛に請け出させる(小春を買い取らせる)他に方法は無いと考えて、家内の銀や衣裳を持ち出そうとするが、来訪した父五左衛門に妨げられ、

おさんは実家に連れ去られる。下の巻「大和屋」名こりの橋づくし」「網島大長寺」では、再会した治兵衛と小春が深夜に抜け出し、心中する。

対照表によって、⑥『心中天の網島』と④『心中紙屋治兵衛』が近似し、かつ①③⑤の他作と本文を共有しないということは明らかと考えるが、たとえば「Dおさんの告白」の末尾が、「始めて明す女房の誠。」と一致するのに対して、④と⑥は異なる。他にも「E小春の救命策」の冒頭・末尾や、「Fおさん荷造り」「Gおさんの今後」の各末尾、「J去状要求」冒頭、をみるならば、⑥『心中天の網島』と④『心中紙屋治兵衛』と、①③⑤のグループが二つの系統に別れることは確かである。このことから後者の系統は、⑤『置土産今織上布』に出発して、『時雨の炬燵』へと変化したことが確かめられる、と筆者は考える。

なお⑥『心中天の網島』と④『心中紙屋治兵衛』を対照したのは、両作の近さ——近松半二『心中紙屋治兵衛』は、近松門左衛門『心中天の網島』を書き替えていないこと——を理解するためである。たとえば国立劇場HP、文化デジタルライブラリー「文楽編 近松門左衛門」(二〇一〇年発表)の「作品を知る」【主要作品紹介】「心中天の網島」の「【作品の現在】」に、

この『心中紙屋治兵衛』と、さらにそれを増補・改作した『天網島時雨炬燵(てんのあみじましぐれのこたつ)』の2作品は、一時期原作の『心中天の網島』よりも頻繁に上演されていました。

と述べて、『時雨の炬燵』の物語を紹介するのが、通説の典型である。しかし第一に、『時雨の炬燵』「紙屋段」は、④『心中紙屋治兵衛』とは無関係である。第二に、④『心中紙屋治兵衛』は、⑥『心中天の網島』をほとんど書き替えるところが無い、という二点をつよく指摘しておきたい⁹⁾。

⑤『置土産今織上布』についての先行研究には、横山正氏「菊野殺しの実説と『置土産今織上布』」があるが、薩摩藩士による「五人切」事件の最初の脚色であることを指摘するに留まる。『浄瑠璃作品要説』「へ」菅専助篇¹¹⁾の、『置土産今織上布』(影響)項に、

部分ではあるが、今日上演される「増補天網島時雨炬燵」の紙屋の段の殆んどの要素が本作の紙屋の段に揃っている。

と触れるのは重要な指摘であったが、両作の間では要素に留まらず、本文そのものが利用されている点をどう捉えたものか判然としない。

そもそも⑥『心中天の網島』は対校表「Nおさんの離縁」までで終わるので、「O小春訪問」以降はすべて⑤『置土産今織上布』の増補なのであるが、この増補に留まらず、文章の書き替えや新たな設定など、様々に手が加えられている。まず「紙屋」端場での変更点としては、

- ・開幕前の時点で小春が来訪して、おさんに戸棚に匿われていること、
- ・お末が五左衛門に連れ去られること、

また「紙屋」ノ切では、「Kおさんの抗議」の件の増補が大きい。(舅五左衛門の銀山への投資失敗を糊塗するために、治兵衛は茶屋遊びを始め、本家の会計監査の目を紛らせたのである)、とする出来事の創案である。これによって、歳甲斐も無く色恋に迷った原作の治兵衛に対して、⑤『置土産今織上布』の治兵衛は責任を軽減される。

「Nおさんの離縁」で、百両を五左衛門へ渡す件を増補するのは、「R五左衛門の手紙」で明かされる五左衛門の解決法と一対を為し、舅の悪辣さを過剰に描出することで以後の展開(五左衛門による、身請資金の提供)をより意外なものとするための工夫と捉える。

「P三五郎おさんの命令実行」では、予めおさんが託した命令に従い、丁稚の三五郎が治兵衛と小春に祝言の盃を勧める。途中、尼姿になったお末が来訪して、「Qおさんの手紙」では、原作『心中天の網島』では詞少なく連れ去られたおさんに、充分にその本心を述べさせる。「T訪問者」は、小春が用意していた迎いの者で、おさん・五左衛門が提案する治兵衛による身請けを断って、小春はこの家を去る。

紙屋を去った小春は、「五人切」事件の登場人物として生きることになるのであるが、これは本稿では割愛したい。以上、⑤『置土産今織上布』における改作の実態を確認した。次に、最初の改作である③『増補天網島』についてみたい。

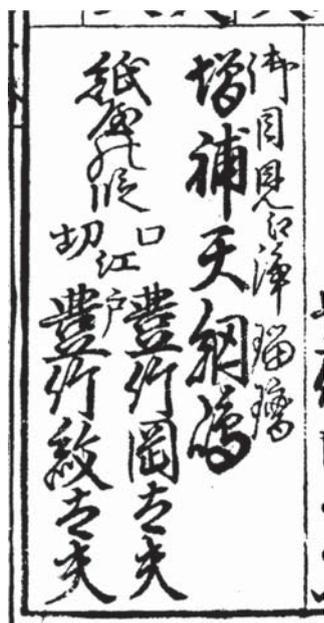
三、『時雨の炬燵』の諸本(二)『増補天網島』

寛政三年(一七九二)三月四日初日、大坂北堀江市の側芝居『彫刻左小刀』初演興行では、大切(おおぎり。最終幕のこと)に江戸から上った二代豊竹紋太夫を出演させ、「御目見江浄瑠璃」と謳って、『増補天網島』『紙屋の段』切を語らせている。こうした場合、新作で臨むことはあり得ず、多くは定評のある、得意な演目を選ぶものである。二代紋太夫において『増補天網島』『紙屋の段』は、既に江戸で当たりを取った、定番の演目であったのだろう、と考えられる。その二代紋太夫が江戸で上演した際に刊行された、と推定される江戸板六行本が出現した。

内題「増・補／天網島紙屋の段 豊竹紋太夫改章」、前表紙に「豊竹紋太夫改章 増補天網島 上 紙屋の段」と記す。江戸「本材木町一丁目西宮新六板」(前表紙)。ただし上冊のみが残り、下冊を欠くため、対校表「O小春訪問」以下の本文を知り得ない。豊竹呂勢太夫師の私蔵本。

前掲・文化三年刊『音曲高名集』は、「二代目竹本紋太夫」項に、「前名倉太夫」「此村屋治兵衛と云」と略伝を記した上で、「取分け江戸にて評判にて中にも生涯の内評判の戯題」として掲出する四作品の最後に「増・補／紙屋治兵衛内の段」と記す。これは寛政三年の『増補天網島』と同じものである。

図二 『彫刻左小刀』巻末所載「浄瑠璃太夫役割」部分
(国立国会図書館一九一—四六〇)



う。『音曲高名集』は特に江戸で出版された本であるから、二代紋太夫が江戸で『増補天網島』を手掛けていたことは確かであると考える。

対校表の③『増補天網島』で二代紋太夫が行った添削の内容は、第一に⑤『置土産今織上布』の拡大した人物関係を、原作⑥『心中天の網島』の範囲に収め直すこと(「E小春の救命策」の栄蔵の件を削除する)にあった。第二の変点は、銀貨から金貨への変換である。『心中天の網島』以下、大坂で初演された④⑥では辟易するほど詳細に書き込まれた、銀貨の換算は上方の顧客には嫌が上にも真実味を増す要素となったと考えるが(近世期上方では銀貨、江戸では金貨が通用した、江戸の顧客に合わせて金貨に改めている。「Fおさん荷造り」でおさんは衣類の総計を④⑥では銀貨に数えるが、③『増補天網島』で初めて「内ばに見ても廿両。」と金貨に換算する。これは①②ともに継承している。

寛政二年(一七九〇)二月刊『三ヶ津浄瑠璃太夫見立相撲并二実名附分而在』では「西方竹本」前頭一枚目に「江戸 紋ヶ淵治兵衛」とみえ、寛政四年(一七九二)正月『京・大坂／浄瑠璃 太夫方・素人方』『役者・位附／見競角力 并二実名所附』では「東 太夫方」前頭二枚目に「先斗町 紋ヶ淵治兵衛」とみえるのが、二代紋太夫(通称此村屋治兵衛)である。前掲・寛政七年(一七九五)五月刊『新改正 三ヶ津浄瑠璃・太夫方素人方・音曲座鋪角力 所付・実名付』には見えないことから、二代紋太夫は寛政五、六年の頃に没したものと推定する。

二代紋太夫は、寛政四年正月二日初日・京四条南側芝居『妹背山婦女庭訓』興行で紋下太夫(一座を代表する地位。太夫の榮譽のひとつの指標)となったが、このとき二代竹本綱太夫、三代竹本綱太夫(当時「浜太夫」)を従えての出演であることは『時雨の炬燵』成立史を振り返る中で、記憶すべき出来事である。二代紋太夫の最後の出演記録は、寛政五年四月・名古屋稲荷御社内芝居『花上野誉の旧跡』興行である。このときも二代綱太夫と同座して、二代紋太夫が太夫人生最後の頃、よく二代綱太夫と一座したことが同人による『増補天網島』の再度の改作を促す契機のひとつ、「紋太夫」名跡を継承する起縁となったかと考えられる。⁽¹²⁾

四、『時雨の炬燵』の諸本 (三) 『増補紙屋治兵衛』

寛政九年（一七九七）三月二十六日初日、大坂道頓堀東芝居『蘭奢待新田景図』興行では、付け物に『天網島』を「上下まくなし」と謳って上演した。『天網島』のタイトルを掲げるが、「浮無瀬のたん」「茶屋の段」「長町のどん」『増補紙屋の段』と並ぶ段編成から、その本文は④『心中紙屋治兵衛』に拠ったものと考えられる。

当該興行以降、江戸時代・近世期の⑥『心中天の網島』の本文は、上の巻は④『心中紙屋治兵衛』『新地茶屋段』に、中の巻の前半・端場は、④『心中紙屋治兵衛』『紙屋の段口』（内題下）・「ちよんがれの段」（前表紙）に、それぞれ置き換えられていく。のちには「紙屋の段」切は、『時雨の炬燵』がこれに組み合わされるのであるが、寛政九年の「増補紙屋の段」は、その一つ前の段階の、従来知られてこなかった本文なのだと推定する。対校表の②『増補紙屋治兵衛』がそれである。本節に紹介する。

内題「増補紙屋の段」、前表紙に「増・補／紙屋治兵衛 紙屋段 竹本綱太夫章」と記す。「大坂船町天満屋玉水源次郎新版」（前表紙。小豆島の中山歌舞伎保存会所蔵本を知る。大坂板五行本の常として刊行年を記さないの、厳密には不明とすべきであるが、内題「増補紙屋の段」と、寛政九年三月興行の番付に掲げる段名とが一致することを素直に解釈するならば、当該上演時の刊行と推定してよいと考える。

対校表の②『増補紙屋治兵衛』で二代綱太夫が行った添削の内容は細かく、全面にわたるため、一見すると③『増補天網島』や⑤『置土産今織上布』から離れるものようであるが、基本的に③『増補天網島』を利用するものであることは、前節に述べた「Fおさん荷造り」の金貨換算を継承する点に明らかである。また「C治兵衛の言訳」で治兵衛は小春の身請けを断念したことを、④『心中紙屋治兵衛』、⑥『心中天の網島』では、「治兵衛が身代いきついで。ヤ銀に詰つての」（引用は④）と噂されるのが無念だといって泣くのだが、⑤『置土産今織上布』では「金の工面に尽た故。小春を退た」と表現が違っている。③『増補天網島』は⑤の系統に立つものの、⑤の「尽た故」

を「つきしゆへ。」と改めていて、この点でも②『増補紙屋治兵衛』は、忠実に③『増補天網島』を継承している。また「Gおさんの今後」末尾でも、⑤『置土産今織上布』は「跡に成てはかへらぬ事。サア／＼早ふ」とするのに対し、①～③は一致して、「跡の間ではせんない事。サア／＼はやふ」（引用は③）と、③で改まった表現を継承している。本文の系統として、②『増補紙屋治兵衛』は、③『増補天網島』と親子関係にあると判定する。

②『増補紙屋治兵衛』の最大の特徴は、「H三五郎登場」の長さにあるが、これは明和元年（一七六四）四月京竹本座初演『京羽二重娘気質』の、七冊目「刀屋」の本文を移植したものである。

近松半二作『京羽二重娘気質』は「お花半七物」で、近松門左衛門作・正徳二年（一七二二）秋『長町女腹切』の改作とされるが、改作の方法は人物関係などを利用するばかりで、七冊目「刀屋」の物語そのものは、⑥『心中天の網島』『紙屋内』を利用して、この点が二代綱太夫の、②『増補紙屋治兵衛』改作の動機、着想のもとになったと推考される。

『京羽二重娘気質』七冊目「刀屋」の、物語の概略を述べる。

京間の町の刀屋半七は、同家の入贅である。妻お岩との間に竹松という子を設けるが、祇園町の遊女お花に馴染む。松原屋善右衛門のために刀を奪われた半七は窮地に追い込まれ、またお花は今夜に迫った身請けを嫌い、ともに死を覚悟する。今生の名残に竹松の顔が見たいと半七は帰宅して、竹松の帯へ書置を忍ばせる。所に義母お辻とお岩が帰るので、とっさにお花を押しに隠す【1】。お辻は、半七を連れて奥へ通る。以上が「刀屋」の端場で、以下が切。お岩は、半七の書置を見付けて動揺する。お辻は、半七にお花と別れるという誓紙（誓約書）を書かせ、舅を宥めるために帰宅する。書置を読んだお岩は、半七に恨み言をいう【2】が、刀を取り戻す資金にと衣装類を質種に取り出す【3】。お岩の目を盗んで、お花を半昇（はんがひ）葛籠。大きな収納具へ移したところで、ここへ舅の道寿が来、今夜から泊まり込むといって、半七を妨げる。その深夜。盗賊が入って、家人を縛った上で、半昇を持ち去る。続いて祇園町の舁屋からお花を探索する人数が来るが、見付けられない。

さらに三助が、舅の家に盗賊が入ったと知らせるので、道寿は帰る。するとお辻が「盗賊と三助は自分が手配して、お花を守った。それは半七に生きて欲しいからだ」と事情を明かす。半七はお花を連れ、立ち退く。前述した「日三五郎登場」は、『京羽二重娘気質』では【3】の位置にある出来事である。

また【1】の押入に身を潜める件は、⑤『置土産今織上布』『紙屋』の、「開幕前の時点で小春が来訪して、おさんに戸棚に匿われる」という件と共通しているが、これは偶然の一致とみるべきではないだろうと考える。安永五年（二七七六）十月初演『桂川連理柵』下の巻「帯屋」で、帯屋長右衛門の死の動機を刀の紛失と設定することとも思い合わせるならば、⑤『置土産今織上布』の作者菅専助も、『京羽二重娘気質』『刀屋』の物語を知悉していると捉えるべきだろうと考える。

また【2】の箇所には次の本文があつて、

「半七様お前はわしが憎いかへ。」コレくそりや何いやるぞいの。子中迄なした中に。「イエくく憎いそふな。憎ましやんすが無理でもない。（中略）あんまりむごい半七様。何ぼお前にどの様なせつない義理が有連も。竹松といふ子をおいて死で仕廻ふという様な。胴欲な事が有物か」と。心の限りくどき立。恨歎くぞ誠なる。

と、右に傍線を引いた部分が、②『増補紙屋治兵衛』の「Bおさんの口説」に取り入れられている。

ほかに「I五左衛門訪問」末尾は、道寿が来訪して出発を妨げられた箇所「京羽二重娘気質」の「うぢく三五郎は。くんやり拍子抜参りの宵に知たる心地也。」（羽七十二丁表一行目）、「O小春訪問」で治兵衛が漏らすおさんへの感歎の詞は、【3】の件で、半七がお岩に向かい「そなたの様の女房が。三千世界に有かいの。」（羽六十八裏六行目）と漏らした詞をやはり『京羽二重娘気質』から移したものである。

二代綱太夫は、稀代の浄瑠璃本の読書家でもあり、上演の絶えた作品から一幕物・付け物の演目を手掛けたことは筆者が予て指摘するところである。

②『増補紙屋治兵衛』における、『京羽二重娘気質』『刀屋』の利用の仕方は、

二代綱太夫にあつてこそ可能なもので、残念ながら文才に乏しい三代綱太夫には為し得ないものと指摘しておきたい。

五、『時雨の炬燵』の諸本（四）『時雨の炬燵』

内題「増補紙屋の段」、前表紙に「治兵衛・小春／時雨の炬燵 竹本紋太夫章」と記す。「大坂天満屋源治郎。京 菱屋治兵衛・松原通麩屋町角墨屋吉兵衛」（前表紙）。京板六行本。豊竹呂勢太夫師の私蔵本。

同文の大坂板五行本は、内題「時雨の炬燵 紙屋段」、前表紙「時雨の炬燵 増・補／紙屋次兵衛 竹本綱太夫章」と記す。「大坂船町天満屋玉水源次郎新版」（前表紙）。徳島県立文書館・三木文庫・伊賀市立上野図書館など。本稿冒頭に述べる、三代竹本綱太夫の改名歴によって、京板六行本は同人の三代紋太夫時代、大坂板五行本は同人の綱太夫改名後の刊行と知られる。文化八年（一八一二）閏二月、大坂いなり境内芝居『妹背山婦女庭訓』興行の、付け物に『増補天網島』と外題して「かみやのだん」切を勤めたのが、三代綱太夫改名後の最初の上演であるので、大坂板五行本の刊行をこのときと推定する。京板六行本は、京での上演に関連した刊行と考えられるが、該当する上演記録が見当たらず、大きく「三代紋太夫時代」と捉えておかねばならないのが残念である。

『義太夫年表 近世篇』が文化三年（一八〇六）の九月か十月と推定した、図三の江戸結城座『妹背山婦女庭訓』興行において、三代紋太夫は付け物に『増補天網島』『紙屋の段』奥を語っている。「御目見へ」「下り」と肩書した

図三 『妹背山婦女庭訓』番付部分（石水博物館）



のは、当該座組へ初めて合流したことを含意するのであるが、新出の番付によつて文化三年十一月には京で三代綱太夫の改名興行に出演したと知られるので、右の江戸下りは、享和末から文化二年頃へ遡らせて考えるべきかと思うがいまは確証を得ない。しかるにここで重要なのは、新たに紋太夫を継いだ者が江戸で披露すべき演目は（改作を施しているとしても）、二代紋太夫（此村屋治兵衛）が得意とした『増補天網島』であるべきだ、と考えたらしい点である。三代紋太夫の三味線は、前掲の『音曲高名集』を聞き写した故実家・三代八兵衛であることもその選曲には大きく関わりどころかと思われる。

顧みて、二代紋太夫から名跡を預かった人物は、二代綱太夫と考えられる（三代綱太夫が直接に譲られたのであるならば、二代綱太夫は②『増補紙屋治兵衛』を手掛けないだろう）。継承の筋目に関わる二代綱太夫、三代紋太夫において、名跡相続の象徴として代表曲『増補天網島』が位置付けられていて、改作が重ねられたものと筆者は解釈するのである。なお「紋太夫」の名前は、仮にも上方の芝居で「紋下」となった格式ある名跡であったが、三代綱太夫が前名として以降、のちには綱太夫の門弟筋の名前として継承されるに至る。

三代紋太夫の①『時雨の炬燵』は、師・二代綱太夫の②『増補紙屋治兵衛』の添削（京羽二重娘気質「刀屋」の利用）を活かしつつも、基本的に二代紋太夫の③『増補天網島』の文辞へ近付け直すという作業を施している。たとえば「A治兵衛の様子」の「治兵衛は傍に有合す定木を枕転寝の。」を⑤③の線に沿って補い直す。他にも、「J去状要求」末尾の「お上にどつさり大白なり。」を採ること、また「Kおさんの抗議」②『増補紙屋治兵衛』は削除したもの（を再び採ること、に同様の作業を認められる）。

なお④『時雨の炬燵』独自の改変としては、「L小春登場」で、従来⑤『置土産今織上布』（その先行作『京羽二重娘気質』『刀屋』）では切に至る前の時点で来訪して押入に潜んでいた遊女小春を、ここで初めて来訪させるという工夫を施した。顧みるならば、従来の設定では小春は押入の中で、おさんの苦衷を聴き続けていた訳で、なぜ飛び出して応じぬのか、との疑問が生じる。この点、小春を未到着とした三代綱太夫（三代紋太夫）の新工夫に、合理性がある。また「Nおさんの離縁」末尾の本文については、③『増補天網島』へ寄

せ直すことをせず、②『増補紙屋治兵衛』が採用した、④『心中紙屋治兵衛』の「跡に見捨る子を捨る。藪に夫婦の双股竹。ながき。別れと。出て行」をそのまま残した。取捨選択の理由は、文辞の良さにもあるうが、おそらくは師・二代綱太夫の語り口をここに活かしているものであろう、と推考する。

以上、人形浄瑠璃文楽・義太夫節の現行曲『時雨の炬燵』に関して、新出した二つの改作を含めて成立過程を考証した。結論としては、第一に⑤『置土産今織上布』の改作であつて④『心中紙屋治兵衛』の改作では無いこと、第二に、最初に付け物化・一幕物化を遂げたのは二代紋太夫であり、さらに二代綱太夫の改作を経て、最終的に三代綱太夫が現行本文の基本をまとめたこと、を重ねて指摘しておきたい。

六、三代竹本綱太夫の添削活動

三代綱太夫には、『時雨の炬燵』『紙屋の段』以外にも、添削を施した作品がある。本節にまとめて触れておきたい。

前名紋太夫時代の営為である、『時雨の炬燵』が第一例。第二例は、三代綱太夫時代の、文化五年（一八一二）九月、大坂御霊社内芝居『小野道風青柳硯』興行の、付け物『艶容舞衣』『上しほ町のだん』切である。大坂では安永元年（一七七二）の初演以来、三十六年振りの再演であつた。大坂板五行本が残り、内題「艶容女舞衣 下の巻の切」、前表紙「増・補／艶容女舞衣 酒屋のだん 竹本綱太夫」と記す。「京墨屋吉兵衛・大坂平野町御霊筋西天満屋安兵衛新板」（前表紙）。志摩市立磯部図書館。三代綱太夫の工夫は半兵衛の咳を入れたことと伝えられるが、本文としては原作「鴛鴦のかた羽の。とぼく」と。の直前に、おそのが剃刀で自害しかけるという件を増補した点を挙げるべきであろう。

第三例は、文化十二年（一八一五）三月、京四条道場芝居『荊萱桑門筑紫轢』興行の、付け物『関取千両幟』『猪名川内の段』切である。明和四年（一七六七）の初演以来、上演を重ねた作品であつたが、このとき原作の主人公「岩川」を当時京都に実在の関取「猪名川」と改めて語った点に新規の工夫があつた。近時、内題「関取千両幟」、前表紙「猪名川内段 増・補／千両幟 竹本綱

太夫章」と記す京板六行本が新出した。「大坂舟町天満屋源次郎。京 四条通寺町西へ入吉野屋勘兵衛・松原通富小路西へ入墨屋吉兵衛／合板」(前表紙)。個人蔵。ただし同年十一月大坂上演時には原作の「岩川」に戻るので、「猪名川」の名前への関心は薄い模様で、むしろ女房のクドキ「モウ相撲取を男に持。」以下を増補した点に、添削の狙いがあつたと考えられる。

第四例は、文化十四年(二八一七)七月、大坂いなり境内芝居『三国無双奴請状』興行の、付け物『薫樹累物語』「土橋の段」切である。原題『伊達競阿国戯場』を、『薫樹累物語』と改題するのは、大坂での最初の再演となる寛政二年(二七九〇)以来のことだが、九ツ目「土橋」の本文に、添削の手を入れたのは、抜き本を刊行させた三代綱太夫であつたと推定される。

京板五行本は、内題「かさね土橋の段」、前表紙「増・補／新累土橋の段 竹本綱太夫・野沢庄治郎」と記す。「京松原通富小路西工入墨屋吉兵衛板」(前表紙)。豊竹呂勢太夫師私蔵本。

大坂板五行本は、内題「薫樹累物語 土橋のだん」、前表紙「薫樹累物語 土橋の段 竹本綱太夫場」と記す。「大坂平野町御霊筋西天満屋安兵衛板」(前表紙)。南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館・那賀町教育委員会・豊竹呂勢太夫師。

年譜では文化十四年七月が初回となるが、これは三回目の上演であつたと捉えておく。⁽¹³⁾「土橋」の添削については、新日本古典文学大系94『近松半二・江戸作者／浄瑠璃集』の脚注に詳しいので参照されたい。同書三九八頁の脚注二三に「この段の五行本は総体に簡略になる。文章としては原作がよい。」と評価するが、筆者も同意である。前々節に「文才に乏しい三代綱太夫」と記したのは、この「土橋」のほか、「猪名川内」の増補したクドキに「女夫に成た今迄を。かぞへ立／恨涙に時うつる。」と記しながら、本文中にその内容は数え上げられていない点など、の拙さに拠る。この点から推考するならば、三代綱太夫時代の添削作品のタイトルが、単に「増補」を冠するか、既成の改題を再使用する、工夫や拘りの無さを示すのに対して、『時雨の炬燵』の題名は、美しい。原作⑥『心中天の網島』にも無く、小春と治兵衛が心中した十月の季語である「時雨」を引いてくる文才は、対校表「A治兵衛

の様子」の、②『増補紙屋治兵衛』の末尾の「背ける顔の北時雨。」と書き替えた、二代綱太夫のものだと思われる。三代紋太夫時代の添削である『時雨の炬燵』のタイトルの良さと、三代綱太夫時代の作品名の工夫の無さは、二代綱太夫の指導の有無に拠るものと考えられよう。

以上、前節にみた『時雨の炬燵』の改作の内容、および本節に指摘する内容から、添削活動(既成の作品を添削して、一幕物化して再演すること)の概要を理解いただけるだろう。三代綱太夫の添削活動は、単なる再演でなくして、語り手である太夫自身が主導して上演本文の改変を進めた事例であるが、何より重要なのはその添削本文が以後、こんにちに至るまで人形浄瑠璃文楽・義太夫節の現行本文として生きている事実である。人形浄瑠璃興行界(特に義太夫節の)は、十八世紀には新作初演を続けたが、十九世紀以降、旧作の再演を手掛けるようになる。⁽¹⁴⁾三代綱太夫を含む、同時代の太夫たちが進めた添削活動は、当時においては旧作発掘の積極的な意義をもつ行為であつたと評すべきだと考える。

本稿冒頭に述べるように、「竹本綱太夫」の初代・二代においても添削活動は行われていて、先々代・先代の添削作品の再演ということも、三代綱太夫は手掛けている。初代綱太夫、二代綱太夫の添削作品をこの頁の左、次頁の上の表にまとめた。三代綱太夫は年譜に示す範囲で、初代綱太夫の添削作品では、「秋津島切腹」四回、「無筆書置」一回を上演した。二代綱太夫の添削作品では、「合邦内」四回、「志渡寺」七回、「平治住家」九回を上演した。自身の添削作品では、「紙屋」六回、「酒屋」四回、「猪名川内」三回、「土橋」二回、を上演している。二代の添削作品の上演回数が自らの添削作品よりも多いのは、芸質が師・二代綱太夫と近いためとも、また師風への憧れとも解

初代竹本綱太夫の添削作品

改題		原題(初演年)
1	『関取二代鑑』「秋津島切腹」	関取二代勝負附(明和五年)
2	『恨鯨鞘』「無筆書置」	裙重浪花八文字(明和六年)

二代竹本綱太夫の添削作品

	改題（『作品名』『段名』）	原題（初演年）
1	『撰州合邦辻』下の巻ノ切「合邦内」	撰州合邦辻（安永二年）
2	『花上野誉の旧跡』四ツ目「志渡寺」	花上野誉の石碑（天明八年）
3	『勢州阿漕浦』「平治住家」	田村麿鈴鹿合戦（寛保元年）
4	『中将姫古跡之松』「雪勢免」	鵬山姫舎松（元文五年）

釈し得るように思われる。

文化三年の三代綱太夫改名の最初、また文化七年「故竹本綱太夫七回忌追善」にいずれも「志渡寺」を選んでゐるのは、二代綱太夫の代表曲と自他共に認められる曲であつたため、と考えられる。こんにちには初演者・初代竹本住太夫の曲風と認識されるが、その本文は二代綱太夫の添削（砂書する養い子・坊太郎に、乳母おつちが尋ねる詞の冒頭に一句「何書しやる。」を添えた）本文で伝承されていることを指摘しておきたい。前節に述べた紋太夫と『増補天綱島』、いま指摘する綱太夫と「志渡寺」のあり方からは、名跡の相続が先代の代表曲の継承を伴つて行なわれる、という伝統演劇の基本的な慣習の存在が認識できるのであろう。綱太夫の代々における添削活動も、その一環なのでと考える。

糸目にかへて

人形浄瑠璃文楽・義太夫節の現行曲には、原作・初演本文と異同のある作品は少なくない。その多くは、本稿の『時雨の炬燵』『紙屋』の例にみたように、過去のある段階で行われた添削を忠実に伝えたものである、と筆者は考える。一節に述べた二代・三代の綱太夫の伝記に関わる新見解や、二節から六節に述べる、諸本調査に基づく新たな発見は、人形浄瑠璃文楽・義太夫節の歴史研究が、ようやく資料の裏付けを以て解明されつつあるという状況にあることをご理解いただけるだろうと思う。

近松門左衛門の作品研究が進展して以降、『時雨の炬燵』『紙屋』は、近松

『心中天の綱島』の原作を破壊するものとして忌避された。八代竹本綱太夫は著書『芸談でんでん虫』の、「近松物と私」で『時雨の炬燵』に触れて、近代人の頭で考えると随分おかしいものであります。原作では「誓紙書かぬがよいわいの」からすぐに「一昨年十月」につづいて、「憎ましやんすが嘘かいな」などはありません。

云々と、近松原作への思い入れを語るのであるが、当該箇所は二代綱太夫が『京羽二重娘気質』から移植したもので、本曲『時雨の炬燵』が二代・三代の綱太夫によって育まれたという事実そのものが忘れられている。近代出来の『心中天の綱島』『紙屋内』でなく、『時雨の炬燵』『紙屋』を丸一段のまま堂々と語って、これこそが芸系の伝統なのだ、という姿勢こそが、将来に生まれるべき新しい綱太夫や伝統演劇としての人形浄瑠璃文楽には相応しい、と筆者は考える。

本論は、江戸の豊竹紋太夫本と、京都の竹本紋太夫本の、ふたつの資料の新出に支えられている。いづれも豊竹呂勢太夫氏の長年の熱心な資料収集による発見であることを記して、御厚志に感謝申し上げます。

本稿をなすにあたって、写真の掲載を許されました黄台山長楽寺、国立国会図書館、石水博物館、八木書店へ御礼申し上げます。また資料の閲覧を許された所蔵機関・所蔵者の皆様へ感謝申し上げます。本稿は、平成二十八年度科学研究費補助金・本研究は JSPS 科研費 JP16H07120 の助成を受けたものです。

註

- (1) 杉山其日庵著『浄瑠璃素人講釈』（一九二六年刊）を原著とし、これに校注を加えて、復刊したもの。岩波書店、二〇〇四年刊。上巻六十三頁より引用。
- (2) 本作浄瑠璃本に「中の巻」の標題はなく、標題のない前半と、「下の巻」と記す後半から成る、上下二巻構成。中の巻でなく、上の巻ノ切に相当するもの。
- (3) 四代竹本綱太夫は三代綱太夫の門弟。天保五年（一八三四）十二月大坂いなり境内芝居『祇園祭礼信仰記』興行で「むら太夫事竹本綱太夫」と改名した。三代綱太夫は、天保三年正月を最後に以後の出演が確認できないので、引退および隠居名「三綱翁」への改名は、天保三年から五年のこと、と考える。



『時雨の炬燵』成立考

(4) 神戸女子大学図書館(森修文庫五五〇六)は、大判縦長の一枚摺。石水博物館(21京その他04)は、通常・横長の役割番付。

(5) 藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第七卷「人形浄瑠璃」(三一書房、一九七五年)に翻刻がある。引用は、香川県立ミュージアム「近石春秋資料」本に拠る。

(6) 国立劇場調査養成部芸能調査室編集、法月俊彦校訂、《演芸資料選書・6》『増補浄瑠璃大系図』上中下三巻と別巻の全四冊(日本芸術文化振興会、一九九三―一九六一年刊)に翻刻がある。

(7) 寛政二年『分而在』、寛政四年『京・大坂/浄瑠璃 太夫方・素人方』『役者・位附/見競角力 并二実名所附』に該当する人物を確認できないので、のちに三代綱太夫となる浜太夫の初出座を、寛政五年から七年五月の間、と推定する。

(8) 正面・右面は本文中に記す通りである。裏面は文字なし。左面の碑文は長文であるので、ここに全文を翻刻する。改行は、碑文の通り。

翁諱佐明字万右衛門幼名万太郎号綱太夫性

人見京師人も有才情長嗜歌曲遊菰圃而師緒

熊竹本綱太夫廻一家之曲者也翁為其高第究

其闕與逐繼其緒而後翁第子愈多世人深嘆其

妙伎亦不小道之器耶世之弄詞曲者率伏從翁

執矩範則及其門者曰若百有餘人今歲為禱翁

寿期挾清潔之地以建朱字碑

越前医員藤子徳識

(9) 『日本古典文学大辞典』第三卷(岩波書店、一九八四年)所載「心中天の綱島」項(諏訪春雄氏執筆)に、「幕末に、『心中紙屋治兵衛』から『時雨炬燵』が生れた。」とする。

(10) 同氏著『近世演劇論叢』、清文堂出版株式会社、一九七六年刊所収。

(11) 国立劇場芸能調査室、一九八一年刊。二二四頁より引用。

(12) 天明二―三年、大坂道頓堀東芝居と江戸肥前座に、ふたりの「竹本綱太夫」が並存する時期があった。このことから猪熊甚兵衛の二代綱太夫の名跡相統は必ずしも

順調でなかったと考えられる。東西いずれの綱太夫が、猪熊なのかは定かでないが、

二代綱太夫は天明三年正月江戸肥前座興行で接点を持つ。おそらくは名跡相統に関

わって二代綱太夫が働くところがあったのではないかと推考する。

(13) 大坂板五行本は、板元の住所表記から文化十二年十月の移転以前の刊行と判断さ

れるので、当該抜き本の刊行と同時期に三代綱太夫の上演があったと推考される。

また京板五行本は、大坂板五行本より前に出たと推定されるので、少なくとも二種

の抜き本に連動する上演は一回あったと推考する。

(14) 拙著『浄瑠璃本史研究』(八木書店、二〇〇九年)では、初代豊竹巴太夫の添削

活動を、『奥州安達原』三段目切「袖袂祭文」を例として取り上げた。

活動を、『奥州安達原』三段目切「袖袂祭文」を例として取り上げた。

三代竹本綱太夫出演年譜(稿)

- 一、本表は三代竹本綱太夫の活動を概観するために作成したもので、三代綱太夫の名前および前名「紋太夫」で出演する興行を網羅した。
- 一、記載事項は、「齢」「初日月日」「興行地」「劇場」「上演作品」「出演作品」段数もしくは段名「段区分」「近世篇」とした。
- 一、「齢」項には、文政四年を還暦・六十歳と仮に見定めた三代綱太夫の年齢を記した(数え。満年齢では一つ減る)。
- 一、「初日月日」項は、当該興行の初日を以て示した。「元号年数・月・日」の要領で記した。
- 一、「興行地」項は、公演の行われた劇場の所在地を、示した。
- 一、「劇場」項は、劇場の名称を、番付に記載の通りに記した。
- 一、「上演作品」項は、番付に記載の作品を、番付に記載の通りに記した。通し・立ての興行の場合、最初に作品名から記すが、通し・立ての作品の無い場合は、「見取り興行」と示した。
- 一、「出演作品」「段数もしくは段名」「段区分」項は、綱太夫の役場を、『』内に作品名、「」内に段数(何段目・何冊目など)あるいは段名(紙屋など)、段区分(口・中・切)の要領で、番付に記載の通りに記した。なおゴチック体で示したものは、初代・二代の綱太夫の添削作品であることを示し、頭に「▼」を付したものは、三代綱太夫の添削作品であることを示す。
- 一、「近世篇」項は、『義太夫年表 近世篇』の番付写真番号を示した。同書に記載があるが番付が新出したものは【番付新出】、同書に記載の無かった興行である場合は、【記載なし】、と示した。

(1) 前名「紋太夫」時代

齢	初日月日	興行地	劇場	上演作品	「出演作品」「段数もしくは段名」「段区分」	近世篇
37	寛政08・03・03	大坂	道頓堀大西芝居	妹背山婦女庭訓	『出演作品』「段数もしくは段名」段区分 『妹背山婦女庭訓』「式段目」中	588
	寛政08・09・15	大坂	北はり江市の側東がわ芝居	双蝶蝶曲輪日記・勢州阿漕浦	『双蝶蝶曲輪日記』「第貳」口、同「第八」口	【記載なし】
	寛政08・10・11	大坂	市のかわ東芝居	祇園祭礼信仰記	『祇園祭礼信仰記』「四段目」奥	591
39	寛政10・11・15	大坂	道とんぼり東の芝居	仮名手本忠臣蔵	『仮名手本忠臣蔵』「第五」、同「第七」かけ合	0615A
40	寛政11・02・27	大坂	北はりへ市の側西ノ芝居	松位姫氏常盤木	『松位姫氏常盤木』「第四」、同「第六」、同「第十」	0622・0653
42	享和01・08・04	京	四条南側大芝居	箱根靈験壁仇討	『箱根靈験壁仇討』「三冊目聚楽御殿黒百合献上」中掛合・同切、同「十冊目境の天神」奥	補訂28
	享和01・12・27	大坂	道頓堀東芝居	豊応丸万歳儀諷	『豊応丸万歳儀諷』「第三 小せき村」、同「第十 与次兵へ住家」	665
43	享和02・01・29	大坂	道頓堀東の芝居	双蝶蝶曲輪日記・苺萱桑門築紫髻	『双蝶蝶曲輪日記』「三つ目」おく、 『苺萱桑門築紫髻』「三段目」次	668
44	享和末・11・01	大坂	ほりへ市ノかは西かは	廿四孝・箱根山・曾根崎村噂・一ノ谷・むかし八丈・そうぜんじ・四季の寿	『箱根山』「山」	687
45	文化03・未詳・12	江戸	ふきや丁結城座	妹背山婦女庭訓・姫山姥・堀川・増補 天網島・鏡山・磯馴松	▼『天網島』「紙屋」奥	0728・0729

(2) 三代「綱太夫」時代

年齢	初日年月日	興行地	劇場	上演作品	「出演作品」 「段数もしくは段名」 段区分	近世篇
45	文化03・11・20	京	寺町道場芝居	花上野誉の石碑・男作五雁金・国性爺合戦・増補時頼記・花扇邯鄲枕	「花上野誉の石碑」 「志渡寺」 切	「記載なし」
46	文化04・01・14	大坂	座本荒木与次兵衛芝居	会稽宮城野錦繡	「会稽宮城野錦繡」 「湯がしま天城山」、同「島原揚屋」	731
	文化04・08・08	大坂	御霊社内芝居	今様殺生石・最明寺百人上臈	「今様殺生石」 「なすの、はら」、 「最明寺百人上臈」 「経世住家」	743
	文化04・09・10	大坂	御霊境内芝居	桜姫操大全	「桜姫操大全」 「清水」、同「蝦蟇丸住家」	0748・0749
	文化04・12・28	大坂	御霊芝居	彦山権現誓助剣・用明天王職人鑑	「彦山権現誓助剣」 「第二」、▼同「第七」	752
47	文化05・01・28	大坂	御霊芝居	一谷嫩軍記・小田館双生日記・勢州阿漕浦・加々見山旧錦絵・義経千本桜	「小田館双生日記」 「四つ目」 口、 「勢州阿漕浦」 「平治内」	755
	文化05・03・02	大坂	御霊芝居	玉黒髪七人化粧	「玉黒髪七人化粧」 「安かた内」 切、同「一つ家」 切	0758a
	文化05・08・20	大坂	てんま天神芝居	鎌倉三代記・勢州阿漕浦・碁太平記白石噺	「鎌倉三代記」 「秀盛やしき」 中、 「勢州阿漕浦」 「平治内」	770
	文化05・09・11	大坂	御霊社内芝居	桑名屋徳三入船物語・三日太平記	「桑名屋徳三入船物語」 「遠州灘」 掛合、同「作太夫住家」	771
49	文化05・09・27	大坂	御霊社内芝居	小野道風青柳硯・艶容婦舞衣	「小野道風青柳硯」 「三段」 中、 ▼「艶容婦舞衣」 「上しほ町」 切	773
	文化07・08・16	大坂	道頓堀大西芝居	三日太平記・花の上野誉石碑・大塔宮曦鏡・京鹿子娘道成寺	「三日太平記」 「松永館」 切、 「花の上野誉石碑」 「志渡寺」 切	0803・0804
50	文化07・10・01	大坂	曾根崎新地芝居	三日太平記・大塔宮曦鏡・京鹿子娘道成寺	「三日太平記」 「松永館」 切	0809A
51	文化08・02閏・05	大坂	いなり境内	妹背山婦女庭訓・増補天網島	「妹背山婦女庭訓」 「式段」 次、 ▼「増補天網島」 「かみや」 切	822
	文化09・04・04	大坂	稲荷境内	四天王寺伽藍鑑	「四天王寺伽藍鑑」 「浪花堀江より弥陀如来出現」 切、同「稲木の内裏にて清上守やと問答」 掛合	847
	文化09・09・06	大坂	いなり社内	八陣守護城	「八陣守護城」 「第三」 切かけ合、同「第十」 切	862
	文化09・10・18	京	和泉式部境内芝居	四天王寺伽藍鑑・四季寿景事	「四天王寺伽藍鑑」 「夢殿」 切かけあい、同「善光住家」 切	865
	文化09・12・26	大坂	道とんぼり大西芝居	瓢馬印黄金千生	「瓢馬印黄金千生」 「第四」、同「第十四」	0867A
52	文化09・02・05	堺	宿院芝居	箱根靈験壁仇討・関取千両幟	「箱根靈験壁仇討」 「阿弥陀寺」 切	870
	文化10・09・08	大坂	いなり境内	瓢馬印黄金千生	「瓢馬印黄金千生」 「捨兵衛住家」 切	873
		大坂		糸桜本町育	「糸桜本町育」 「守山」 おく、同「浅草」 切	0890A

文化10・11・13	大坂	稲荷境内	箱根靈驗覽仇討	「箱根靈驗覽仇討」「だいが坂口」おく、同「あみだ寺」切	0896A
文化10・12・22	大坂	いなり社内	下総国累語	「下総国累語」「田糸姫ほつしん」おく、同「垣生村」切	899
文化11・02・22	大坂	いなり境内	酒呑童子話	「酒呑童子話」「八瀬の里」切、同「土ぐも退治」切	0902A
文化11・03・上旬	伊勢	勢州中地藏大芝居	鎌倉三代記	「鎌倉三代記」「第六」切	904
文化11・03・22	伊勢	勢州中地藏大芝居	繪本太功記・立春姫小松	「繪本太功記」「光秀館」、同「尼ヶ崎」切	906
文化11・04・11	伊勢	勢州中地藏大芝居	花禊会稽掲布染・芦屋道満大内鑑	「花禊会稽掲布染」「第六」、 「芦屋道満大内鑑」「四段目」詰かけ合	908
文化11・05・04	伊勢	勢州中地藏大芝居	「見取り興行」・ひらかな盛衰記・心中 天網島・芦屋道満大内鑑	▼「心中天網島」「紙や」切、 「芦屋道満大内鑑」「四段目」詰かけ合	911
文化11・05・15	伊勢	勢州中ノ地藏常芝居	双蝶々曲輪日記・加々見山旧錦絵・浪花形伊勢浜荻	「双蝶々曲輪日記」「八段目」切	913
文化12・01・24	京	四条道場芝居	鄙島原由緒菊水	「鄙島原由緒菊水」「菊谷」口、 同「杣木根住家」切	「記載なし」
文化12・03・03	京	四条道場芝居	苜萱桑門筑紫轆・関取千両幟	「苜萱桑門筑紫轆」「監物屋敷」口、 ▼「関取千両幟」「猪名川内」	補訂45
文化12・11・02	大坂	いなり社内	菅原伝授手習鑑・関取千両幟	「菅原伝授手習鑑」「三段目」切、 ▼「関取千両幟」「岩川内」	953
文化12・11・17	大坂	いなり社内	和田合戦女舞鶴・勢州阿漕浦・風流戯 曾我・ひらかな盛衰記	「和田合戦女舞鶴」「式段目」中、 「勢州阿漕浦」「平治住家」	955
文化12・12・24	大坂	いなり社内	日本賢女鑑・檀浦兜軍記	「日本賢女鑑」「十冊目」切、 「檀浦兜軍記」「琴責」かけ合重忠	957
文化13・02・12	大坂	いなり社内	新うすゆき物語・桂川連理柵	「新うすゆき物語」「清水でら」中、同「たへま」切	962
文化13・03・21	大坂	いなり社内	伊賀越道中双六・迎駕籠死期茜染・桂川連理柵	「伊賀越道中双六」「第五」切、同「第八」切	965
文化13・05・03	大坂	稲荷境内	比良嶽雪見陣立・撰州渡辺橋供養・艶容女舞衣	▼「艶容女舞衣」「半七内」切	967
文化13・06・06	大坂	いなり社内	一谷嫩軍記・撰州合邦辻・初嵐元文嘯	「一谷嫩軍記」「式段目」口、 「初嵐元文嘯」「茶屋」切	968
文化13・08・15	名古屋	清寿院御境内	伊賀越道中双六・撰州合邦辻・慣ちよつと七化	「伊賀越道中双六」「大広間」、同「岡崎」	0972A
文化13・08・08	名古屋	清寿院御境内	双蝶々曲輪日記・伽羅先代萩・艶容女舞衣	「双蝶々曲輪日記」「八幡」、 ▼「艶容女舞衣」「酒屋」	0974A

64	63	62	61
文政08・01・02	文政07・04・中旬 08・22以前 文政07・08・22	文政06・02・吉 文政06・04・16 文政06・05・05 文政06・06・12 文政06・09・吉	文政05・01・08 文政05・01・28 文政05・03・03
江戸	江戸	京	大坂
結城座	大薩摩座	四條北側芝居	道頓堀角丸芝居
波の鳴戸	箱根靈驗覺伏討・名筆けいせい鑑	繪合太功記・芦屋道満大内鑑	出世奴稚話
鎮西八郎譽弓勢・関取千両幟・契情阿	野・姫山姥・万代曾我	神靈矢口渡・傾城阿波の鳴戸	彦山権現誓助劍・傾城阿波の鳴門
▼「関取千両幟」	「伊賀越」	「日吉丸稚桜」	「妹背山婦女庭訓」
「岩川内」切	「沼津」	「初あらし元文嘯」	「三段目」切かけ合
切	切	「しんち茶や」切	「紙屋」切
1182・1183	補訂56	「本朝廿四孝」	「掛合」
		「二ノ切」中、	「増補天網島」
		「勢州阿漕浦」	「紙屋」切
		「平治住家」	「三段目」切かけ合
		「彦山権現誓助劍」	「増補天網島」
		「九つ目」切	「紙屋」切
		「花上野」	「三段目」掛合
		「志渡寺」切	「増補天網島」
		「太平記忠臣講釈」	「紙屋」切
		「四段目」切、同「八段目」切、	「三段目」掛合
		「兜軍記」	「岡ざき」切、
		「琴責」	「檀浦兜軍記」
		「かけ合	「琴責」
		「箱根靈驗覺伏討」	「岩永
		「九十九屋敷」切、同「滝」切	「岡崎」切
		切	「岡崎」切
			「接合駅路梅」
			「岡崎」切
			「接合駅路梅」
			「岡崎」切
			「小野道風青柳硯」
			「式段目」中、
			「花上野譽の石碑」
			「志渡寺」切
			「義経千本桜」
			「二の切」次、
			「けいせい倭莊子」
			「郡治兵へ内」切
			「繪合太功記」
			「杉の森籠城」切、
			「芦屋道満大内鑑」
			「信田の森」かけ合
			「神靈矢口渡」
			「式段目」おく、同「四段目」切
			「日吉丸稚桜」
			「東吉部や」切、
			「宿無団七時雨傘」
			「岩井風呂」
			「初あらし元文嘯」
			「しんち茶や」切
			「本朝廿四孝」
			「二ノ切」中、
			「勢州阿漕浦」
			「平治住家」
			「彦山権現誓助劍」
			「九つ目」切
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺」切
			「太平記忠臣講釈」
			「四段目」切、同「八段目」切、
			「兜軍記」
			「琴責」
			「かけ合
			「箱根靈驗覺伏討」
			「九十九屋敷」切、同「滝」切
			切
			「伊賀越」
			「沼津」
			「花上野」
			「志渡寺

67	文政11・01・吉	京	四条南側大芝居	新うすゆき物語・伽羅先代萩・関取二代鑑・恋娘昔八丈・博多織	「新うすゆき物語」鍛冶屋一切、 「関取二代鑑」秋津島内」切	1302A
	文政10・11・14	名古屋	若宮御社内	立春姫小松・関取二代鑑・恋飛脚大和往来	「立春姫小松」二段目」切、 「関取二代鑑」あきつしま内」切	1293
	文政10・11・08	名古屋	若宮御社内	伊賀越道中双六	「伊賀越道中双六」沼津」	1292
	文政10・10・24	名古屋	なごや若宮御社内	ひらかな盛衰記・芦屋道満大内鑑	「ひらかな盛衰記」二段目」切、同「三段目」切	1289
	文政10・09	堺	堺大寺芝居	「見取り興行」・いざり仇討・のざき村・すみだ川	「いざり仇討」あみだ寺」切	1286
	文政10・08・13	大坂	堀江荒木芝居	酒吞童子話・関取二代鏡	「酒吞童子話」矢背」切、 「関取二代鏡」秋津島内」切	1279・1280
	文政10・07・吉	京	四条道場芝居	軍法富士見西行・初あらし元文嘸・山姥	「初あらし元文嘸」茶や」切	1277A
	文政10・07・11	大坂	ほり江荒木芝居	伊賀越・隅田川黄金入船	「隅田川黄金入船」甚三内」	1275
	文政10・03・16	大坂	あみだ池境内	ひらかな盛衰記	「ひらかな盛衰記」三段目逆槽」切	1261
	文政10・01・27	大坂	いなり社内	大内裏大友真鳥・摂州合邦辻	「摂州合邦辻」合邦住家」切	1256A
66	文政10・01・02	大坂	稲荷社内	絵本太功記・博多小女郎恋鏝	「絵本太功記」杉の森」切、 「博多小女郎恋鏝」柳町」	1252a
	文政09・10・20以後	奈良	奈良瓦堂芝居	ひらかな盛衰記・琴責	「ひらかな盛衰記」三段目」切、 「琴責」かけ合岩永	1251A
	文政09・10・14	兵庫	兵庫芝居	軍記 ひらかな盛衰記・新板歌祭文・壇浦兜	「ひらかな盛衰記」三段目」切、 「壇浦兜軍記」琴責」かけ合岩永	1244
	文政09・09・15	京	四条道場芝居	軍記 ひらかな盛衰記・新板歌祭文・壇浦兜	「ひらかな盛衰記」三」切、 「壇浦兜軍記」琴責」かけ合岩永左衛門	1239A
	文政09・08・25	京	四条北側大芝居	箱根靈験躰仇討・猿曳門出調・最中秋七種	「箱根靈験躰仇討」阿弥陀寺」切	1237
	文政09・08・16	京	四条北側大芝居	楓・紅狩剣本地・最中秋七種	「一谷嫩軍記」式」奥、同「三」切	1234A
	文政09・05・15	大坂	稲荷社内	夏祭浪花鑑・傾城恋飛脚	「夏祭浪花鑑」大序、同「第八団七内」	1227
	文政09・03・18	大坂	いなり境内	伊賀越	「伊賀越」木辻揚屋」かけ合、同「岡崎」切	1219A
	文政09・02・04	大坂	いなり社内	有職鎌倉山・加賀見山旧錦絵	「有職鎌倉山」七冊目」切、 「加賀見山旧錦絵」長局」切かけ合	1214A
65	文政09・01・02	大坂	いなり社内	箱根靈験躰仇討・艶容婦舞衣	「箱根靈験躰仇討」阿弥陀寺」切、 ▼「艶容婦舞衣」酒や」切	1210

71	天保03・01・下旬	兵庫	兵庫芝居	妹背山婦女庭訓・東街道四谷怪談	〔妹背山婦女庭訓〕「三段目」かけ合、同「四段目」おく	1452
	天保03・01・05	大坂	御霊社内	妹背山婦女庭訓・隅田川続傳	〔妹背山婦女庭訓〕「三段目」かけ合、同「四段目」おく	1447A
	天保02・10・08	大坂	道頓堀若太夫芝居	仮名手本忠臣蔵	〔仮名手本忠臣蔵〕「六つ目」切	1440
	天保02・09・吉	大坂	道頓堀若太夫芝居	彦山権現誓助劍	〔彦山権現誓助劍〕「六つ目」切、同「九つ目」切	1438
	天保02・08・01	大坂	道頓堀若太夫芝居	国性爺合戦・関取二代鑑	〔関取二代鑑〕「秋津島内」切	1431a
70	天保02・01・吉	京	四条南側大芝居	本朝廿四孝・七草若菜切	〔本朝廿四孝〕「式」口、 〔七草若菜切〕「山名館」切	1412a
	天保01・11・01	大坂	御霊境内	彦山権現誓助劍	〔彦山権現誓助劍〕「五つ目」切、同「九つ目」切	1408
	天保01・10・17	大坂	御霊境内	菅原伝授手習鑑	〔菅原伝授手習鑑〕「三段目」切、 〔加賀見山旧錦絵〕「七つ目」切かけ合	1407
	天保01・09・25	大坂	御霊境内	ひらかな盛衰記	〔ひらかな盛衰記〕「式段目」中、 〔勢州阿漕浦〕「平治住家」切	1401
	天保01・08・10	大坂	御霊境内	絵合太功記	〔勢州阿漕浦〕「平治住家」切	1399D
	天保01・06・12	名古屋	清寿院御境内芝居	新薄雪物語	〔新薄雪物語〕「六原」切、 〔夏祭浪花鑑〕「団七九郎兵へ住家」	1392
	天保01・05・13	名古屋	清寿院芝居	見山旧錦絵	〔見山旧錦絵〕「長局」切かけ合、 〔曾根崎村噂〕「敬興寺村」切	1386A
	天保01・04・10	名古屋	清寿院御境内芝居	仮名手本忠臣蔵	〔仮名手本忠臣蔵〕「七つ目」かけ合、同「喜内住家」切	1381
	天保01・03・25	名古屋	清寿院御境内	蝶花形名歌島台	〔蝶花形名歌島台〕「六段目」中、 〔国言詢音頭〕「茶屋場」切	1377
	天保01・03・03	名古屋	清寿院御境内芝居	傾城墨染桜	〔勢州阿漕浦〕「平治住家」切、 〔衆の仙人吉野花王〕「山」かけ合	1373a
	天保01・02・12	名古屋	清寿院御境内芝居	三日太平記	〔三日太平記〕「小田居茶屋」中、 〔小野道風青柳硯〕「三段目」切	1369a
69	文政12・10・14	兵庫	兵庫津芝居	木下蔭狭間合戦	〔木下蔭狭間合戦〕「九つ目」切、 〔芦屋道満大内鑑〕「道ゆき信田の二人妻」やかん平	1360

表 『時雨の炬燵』 関係諸作対校表

一、本表は『時雨の炬燵』の諸本間の異同をみるために作製したものである（本文のみを翻刻した。節章・振り仮名・捨て仮名は省略した）。

- 一、「No」項には、異同の詳細を見やすくするために次のようにABC順の分節を設けた。
- A 治兵衛の様子
 - B おさんの口説
 - C 治兵衛の言い訳
 - D おさんの告白
 - E 小春の救命策
 - F おさん荷造り
 - G おさんの今後
 - H 三五郎登場
 - I 五左衛門訪問
 - J 去状要求
 - K おさんの抗議
 - L 小春登場
 - M 五左衛門箆筒の確認
 - N おさんの離縁
 - O 小春訪問
 - P 三五郎おさんの命令実行
 - Q おさんの手紙
 - R 五左衛門の手紙
 - S 治兵衛小春号泣
 - T 訪問者
- 一、「①時雨の炬燵」項には、京板六行本（内題「増補紙屋の段」、前表紙「治兵衛・小春／時雨の炬燵 竹本紋太夫章」）の本文を記した。
- 一、「②増補紙屋治兵衛」項には、大坂板五行本（内題「増補紙屋の段」、前表紙「増・補／紙屋治兵衛 紙屋段 竹本綱太夫章」）の本文を記した。
- 一、「③増補天網島」項には、江戸板六行本（内題「増・補／天網島紙屋の段 豊竹紋太夫改章」、前表紙「豊竹紋太夫改章 増補天網島 紙屋の段」）の本文を記した。
- 一、「④心中紙屋治兵衛」項には、通し本・初板七行本の本文を記した。
- 一、「⑤置土産今織上布」項には、通し本・初板七行本の本文を記した。
- 一、「⑥心中天の網島」項には、通し本・初板七行本の本文を記した。

No.	A
①時雨の炬燵	へすぐに仏なり。門送り。さへそこく定木を枕転寝の。あたる火燵の小春時。「まだ曾根崎を忘れずか」と。退るふとんの内さへも。涙にしめる其風情。
②増補紙屋治兵衛	跡見送つて明んとする襖より先こなたの襖。出る女房にそらさぬ顔。おさんは夫の傍に寄。「こちの人さつきに噂様の。私を除て云しやんしたは。（紙屋一ノ二オ）何の事で有たへ」「ヤ夫か。それはアノ夫く用心が悪い程に。夜ざとふ寝いて、」「ヲ、噂様もそんな事なら。何のわしに隠す事。」「サイノおれも何や角やでほとりと気草臥。酒一ぱい吞してたも。あ（紙屋一ノ二ウ）いらいに云へば仰山な。太義ながら問して来て。吾儕も一つ吞で寝や」と。背ける顔の北時雨。
③増補天網島	へすぐに仏なり。門おくり。さへそこく定木を枕うたゝねの。顔にあふぎの小夜がうし「まだ曾根崎をわすれずか」と。のけるあふぎのぢがみさへ。涙にしめる其ふぜい。
④心中紙屋治兵衛	へすぐに仏成。門送りさへそこくに敷居も越や越ぬ中。巨燵に治兵衛又ころり。かふる蒲団の格子島。「まだ曾根崎を忘れずか」と。鞆ながら立寄。蒲団を取て引退れば。枕につたふ涙の瀧身もうく。計り泣居る。
⑤置土産今織上布	へさしてぞ立帰る。（今織三十一ウ）門送りさへそこくに。次兵衛は傍に有合す。定木を枕転寝の。顔に扇の小夜格子。「まだ曾根崎を忘れずか」と。思ひながらも傍に寄。「さつきに聞ば精進を落さしやんしたではないかいな。勘太も寝入て居るそふなり。傍に人もない程に。序に精進落ていな」と。退る扇の地紙さへ涙にしめる其風情。
⑥心中天の網島	すぐに仏成。門おくりさへそこくにしきあもこすやこさぬ中。こたつに治兵衛又ころり。かふるふとんのかうし島。「まだそねさきをわすれ（紙二十三オ）ずか」と。あきれながら立よつて。ふとんを取て引のくれは枕につたふ涙のたき身もうく計泣あたる。

D	<p>「エ、そんならほんまに小春様は。お前にあいそづかしをいふて。太兵衛が所へ行はづかへ。」「ハテきよとくしい其声はいの。」「ヲ、そんなら小春</p>	<p>不心中。今といふ今夢もさめ。思ひ切ては居るけれど。ソレさつき(紙屋ノ三ウ)にも咄せしことく。アノ太兵衛めが。急に身請をするとの噂。退て十日も立ぬ中。請出さるゝ義理しらすの。義理しらすの。問屋中の付合にも。『金の工面に尽し故。小春を退た』の何の端に。かゝるが無念な口惜いと。思はず涙をこぼし(紙屋ノ四オ)たはいのふ。」</p>
<p>「エ、アノ小春様はお前にあいそをつかし。真実太兵衛が所へ(紙屋五ウ)行しやんすかへ。そんなら小春様は生て居る氣じやないはいな。」「エ、アノ</p>	<p>兵衛めが急に身請をするとの噂。退て十日も立ぬ中。請出さるゝ義理しらすの。(紙屋五オ)小春に心は残らねど。問屋中の付合にも。『金の工面に尽し故。小春を退た』の何の端に。かゝるが無念な口惜い。」</p>	
<p>「エ、そんなりやほんまに小はるはおまへにあいそづかしをいふて。太兵衛が所へ行はづかへ。」「ハテきよとくしい其こへはいの。」「ヲ、そん</p>	<p>ぬ。そなたにいふもはづかしながら。此間も曾根崎で。残らず聞た小はるめが不心中。今といふ今夢もさめ。思ひ切てはるけれど。さつきにもはなせしごとく。あの大兵衛めが急に身受をするとうはさき。のいて十日も立ぬ中。受出されるぎりしらすの。小はるめが事は心のこらねど。問屋中の附合にも。『金のくめにしゆへ。小はるをのいた』と様々の。かげ口を聞口おしき。すいりやうしてたもいの」と。おつとの詞におどろくおさん。ソリヤおまへしんじつでござんすかへ。」「ライノかう成上は何の偽り。ことにあの大兵衛めは。わる者附合をするやつ。ゑしれぬやつらが口のはに。かゝるがむねんな口おしいと。思はず涙をこぼしたはいのふ。」</p>	
<p>「ヤアアハアそれなればいとしや小春は死にやるぞや。」「ハテ扱。何ぼ利発でも。遠町の女房じやの。あの不心中者何の死ふ。灸をすへ葉吞で。命</p>	<p>がらの太兵衛。銀は自由妻子はなし。請出す工面仕つれ共。其時迄は小春めが。太兵衛が心に随はず。『少しも氣づかひなされな。たとへこなさんと縁きれ。添れぬ身に成たり共。太兵衛には請出されぬ。若金せきで親方からやるならば。物の見事に死で見しよ』と。度々詞を放ちしが。是見や退て十日も立ぬ中。太兵衛めに請出さるゝ。くさり女の四つ足めに。心はゆめく残りね共。(紙屋五十ウ)太兵衛めが身代いきついで。ヤ銀に詰つての『なんど。大坂中をふれ廻り。問屋中の付合にも。頬が裂る身がもへる。エ、口惜い。無念な。あつい涙血の涙。ねばい涙を打こへ。熱鉄の涙か盈るゝ』とどうどふして。泣ければ。はつとおさんが興さめ顔。</p>	
<p>そんならば小春殿は。死しやんすはいなく。こり(今織三十三ノ五ウ)やどふせふ」と立つ居つ。騒ぐ女房騒がぬ夫「ハテ扱。何ぼ発明でも</p>	<p>衛。急に身受をするとの噂。退て十日も立ぬ中。受出される義理しらすめ。少しも心は残らねど。悪者共が口の端に『金の工面に尽し故。小春を退た』と様々の影口を聞口惜さ。推量してたもいの」と。夫の詞に驚くおさん「エ、何といはしやんす。そりや真実でござんすかへ。」</p>	
<p>「ヤアウハアそれなればいとしや小はるはしにやるそや。」「ハテサテなんぼりはつでもさすが町の女房じやの。あのぶ心中者なんのしなふ。きうをす</p>	<p>すがらの太兵衛。かねはじゆうさいしはなし請出すぐめんしつれ共。其時迄はこはるめが。太兵衛が心にしたがはず。『少しもきづかひなされなたとへこなさんと縁きれ。そはれぬ身(紙二十四オ)に成たり共。太兵衛には請出されぬもしかねせきで親かたからやるならば。物の見ことに死んで見しよ』と。たびく詞をはなちしがこれ見やのいて十日もたぬ中。太兵衛めに請出さるゝくさり女の四ツ足めに。心はゆめく残りね共。太兵衛めがいんげんこき。『治兵衛しんだいいきついでのかねにつまつて』なんど。大坂中をふれ廻りとい屋中の付合にも。つらをまぶられいき恥かく胸がさける身がもへる。エ、口おしい無念なあつい涙血の涙。ねばい涙を打こへ。ねつてつ涙がこぼるゝ』とどう(紙二十四ウ)とふして泣ければ。はつとおさんがけうさめ顔。</p>	

<p>E</p> <p>「ム、そんならアノ不心中と見せたのは。そなたの</p>	<p>様は生て居る気じやないはいな。ア、死しやんすはいな。コリヤどふせふ」と立つ居つ。さほぐ女房騒がぬ夫。「ハテ扱何ぼ発明でも。さすが町の(紙屋ノ四ウ)女房じや。アノ不心中者が何の死ふぞ。」「イエ〜そふじやござんせぬ。小春様に不心中は芥子程もないけれど。日外よりお前のそぶり。何を云ても(紙屋六オ)うか〜と。若悲しい目も見よふかと。案じ過して小春様へ。『いとしいと思はんと。治兵衛様の為じや程に。思ひ切て下さんせ』と書くだいてやつた文。引れ(紙屋ノ五オ)ぬ義理と合点して『親にもかへぬ恋なれど。思ひ切』との嬉しい返事。是程真実な心で。何の太兵衛の所へ行しやんしよ。請出されたら其儘に。死る覚悟に違ひはない。小春様を殺しては此さんが義理立ず。どふぞ命が助けたい。思案して下さんせ。ひよんな事どふせふ」と。始て明す女房(紙屋ノ五ウ)の誠。</p>
<p>「ム、そんならアノ不心中と見せたのは。そなたの</p>	<p>不心中者が何の死ふぞいの。」「イエ〜。小春様に不心中は芥子程もないけれど。日外よりお前のそぶり。何を云ても(紙屋六オ)うか〜と。若悲しい目も見よふかと。案じ過して小春様に。『いとしいと思はんと。治兵衛様の為じや程に。思ひ切て下さんせ』と。書くだいてやつた文。『引れぬ義理と合点して親にもかへ(紙屋六ウ)ぬ恋なれど。思ひ切』との嬉しい返事。是程真実な心で。何の太兵衛の所へ行しやんしよ。請出されたら其儘に。死る覚悟に違ひはない。小春様を殺しては此さんが義理立ず」と。始めて(紙屋七オ)明す女房の誠。</p>
<p>「ム、そんならアノ不心中と見せたのは。そなたの</p>	<p>なら小(紙屋上二ウ)は殿は生てゐるきじやないはいな。ア、死しやんすはいな。コリヤどふせふ」と立つ居つ。さほぐ女房さほぐおつと。「ハテ扱。何ぼはつめいでもさすが町の女房じや。アノ不心中者が何の死ふぞ。」「イエ〜そふじやござんせぬ。小はる殿に不心中は。けし程もないけれど。いつぞやよりおまへのそぶり。何をいふてもうか〜と。何若かなしいめも見よふかとあんじすして小はる殿へ。『いとしいと思はんと。次兵衛殿の為じや程に。思ひ切て下さんせ』と。(紙屋上三オ)書くだいてやつた文。『引れぬぎりとがてんして。親にもかへぬ恋なれど。思ひ切』とのうれしいへんじ。是程にしんじつな心で。何の太兵衛の所へ行しやんしよ。受出されたら其まゝに。死るかくごにちがひはない。小はる殿をころしては此さんがぎり立ず。どふぞ命がたすけたい。コレしあんして下さんせ。ア、ひよんな事どふせふ」と。はじめて明す女房の誠。</p>
<p>夫もはいもうし。「取返した起請の中しらぬ女の</p>	<p>の養生するはいの。」「イヤ〜そふでない。わしが一生いふまいとは思へ共。かくしつゝんでむぎ〜殺す。其罪も恐ろしく。大事の事を打明る。小春殿に不(紙屋五十一オ)心中けし程もなければ共。二人の手を切せしは此さんがからくり。こな様がうか〜と。死る気色も見へし故。余り悲し切れぬ所を思ひ切。夫の命を頼〜と。かきくだいた文をかんに。『身にも命にもかへぬ大事の殿なれど。引れぬ義理合思ひ。切』との返事わしや。是守りに身をはなさぬ。是程の賢女が。こな様との契約違へ。おめ〜太兵衛に添ふ物か。女は我人一むきに思ひかへしのないもの。死にやるはいの〜。ア、ア、ひよんな事。サア〜サとうぞ助けて〜と。さほぐば</p>
<p>「スリヤ不心中と見せたのは。やつぱりおれを大切</p>	<p>道町の女房じや。無心中者何の死ふ。」「イエ〜そふじやござんせぬ。小春殿に無心中は。芥子程もないけれど。日外からのお前のそぶり。何をいふてもうか〜と。若悲しい目も見よふかと案じ過して小春殿へ。『いとしほがつて下さんす夫の為じやと諦めて。思ひ切て下さんせ』とかき詢いてやつた文。『ひかれぬ義理と合点して身にも替ぬ恋なれど。思ひ切』との嬉しい返事。是程に真実な心で何の約束違へ。太兵衛とやらに請出さるゝのは。死る心に違ひはない。小春殿を殺しては女子同士の義理立ず。どふぞ命か助けたい。思案して(今織三十六オ)下さんせ」と始て明す女房の誠。</p>
<p>夫もはいもうし。「取返したきしやうの中しらぬ</p>	<p>ゑくすりのんでいのちのやうじやうするはいの。」「いやそうでないわしが一生いふまいとは思へ共。かくしつゝんでむぎ〜こるす其つみもおそろしく。大じの事を打あける。小はる殿に不心中けし程もなければ共。ふたりの手をきらせしは此さんがからくり。こな様がうか〜としぬるけしきも見へしゆへ。あまりかなしさ『女はあいみたがびごと。(紙二十五オ)きられぬ所を思ひ切夫の命を頼む〜と。かきくだいだふみをかんに。『身にも命にもかへぬ大じのとなれど。ひかれぬ義理合おもひ切』との返事。わしやまもりに身をはなさぬ。是程のけんちよがこなさんとのけいやくちがへ。おめ〜太兵衛にそふ物か。おなごは我人一むきに思ひかへしのない物。しにやるはいの〜。ア、ア、ひよんなことサアサアサどうぞたすけて〜と。さはげ</p>

<p>頼みか。「アイ。」「ム、すりややつぱりおれを太切から。ハアそふとはしらず今迄も。義理しらずの畜生のと。恨だ心が恥しい。」「ア、コレ夫いふ手間でこな様往て。どふぞ殺さぬ様にして進せて下さんせいなく。」「ハテ小春が命助るは百五十両。せめて半金成（紙屋ノ六オ）共手附に渡し。取留るより外はない。カ何をいふても金の工面に尽た此身。」「ノウ仰山な夫ですむなら安い事」と。立て簞笥の小引出し明てとり出すまいませの。紐付帛紗押開き。差出す一包。治兵衛取上悔りし。「ヤコリヤコレ小判五十両。どふしてマアそなたが。」</p>	<p>頼みか。「アイ。」「エ、そふとはしらず今迄も恨んだ心が恥かしい。」「ア、コレ夫いふ手間でこな様往て。どふぞ死しやんせぬ様にして下さんせいなく。」（紙屋七ウ）「何云やるぞいの。小春が命助ふと思へば。百五十両金がある。せめて半金也と手附に渡し取留るより外はない。ガ何を云ても其金が。」「ヲ、仰山な夫で済なら安い事」と。立て簞笥の小引出し明て（紙屋八オ）取出すまい交の。紐付帛紗押ひらき。差出す一包。治兵衛取上悔りし。「ヤコリヤコレ小判五十両。どふしてマアそなたが。」</p>	<p>の頼みか。「アイ。」「ムスリヤ。やつぱりおれを大切から。（紙屋上三ウ）ハアそふとはしらず今迄も。ぎりしらずのちくしやうのと。うらんだ心がはづかしい。」「ア、コレ夫いふ手間でこな様いで。どふぞころさぬ様にして。しんせてくださんせ。」「ハテ小はるが命たすけるは百五十両。せめて半金成共手附に渡し。取とめるよりほかはない。ガ何をいふても金のくめんにつきた此身。」「のふげうさんな。夫ですむならやすい事」と。立てたんすの小引出し明て取出すまいませの。ひも付ふくさおしひらき。さし出す一つ、み。次兵衛取あげ（紙屋上四オ）びつくりし。「ヤコリヤコレ五十両。どふしてマアそなたが。」</p>	<p>文一通。兄貴の手へ渡りしは。おぬしからいた文な。（紙屋五十一ウ）夫なれば此小春死るぞ。」「ア、悲しや此人を殺しては。女子同士の義理立ては。先こな様早ふ往て。どふぞ殺して下さるな」と夫に縋り泣しづむ。「それ連も何とせん半銀も手附を打。つなぎとめて見るばかり。小春が命は新銀七百五十匁飲さねば。此世にとむる事ならず。今の治兵衛が四つ三貫目の才覚。打みしやいでもどこから出る。」「なふ仰山なそれで済ばいとやすし」と。立て簞笥の小引出し。明ておしげもなひ交の。紐付ふくろ押ひらき投出す一包。治兵衛取上。「ヤかねか。しかも新銀四百目。こりやどふして」と我置ぬ銀に。目さむる計也。</p>	<p>から。そふとは知ず今迄も義理しらずの畜生のと。恨んだ心が恥しい。小春か命助るは半金なりと手附に渡し。命をつなぐ身請の金は栄蔵の志。」</p>	<p>女のふみ一通。兄きの手へわたりしはおぬしからいたふみな。それなれば此小（紙二十五ウ）はるしぬるぞ。」「ア、悲しや此人をころしては。女どしのぎりた、ぬまづこなさんはやういて。どうぞころしてくださるな」と夫にすがり泣しづむ。「それとても何とせん半がねも手付を打。つなぎとめてみる計。小はるが命は新銀七百五十匁のまさねば此世にとむることならず。今の治兵衛が四つ三貫目のさいかく。打みしやいでもどこから出る。」「なふきやうさんなそれですまばいとやすし」と。立てたんすの小引出し明ておしげもなひませの。ひほ付ふくろ押ひらきなげ出す一つ、み。治兵衛取上「ヤかねか。しかも新銀四百目。（紙二十六オ）こりやどうして」と我置ぬかねにめさむる計なり。</p>
<p>F 「サア此金の出所も。跡で語れば知る事。（紙屋ノ六ウ）此晦日に岩国の仕切銀に。さいかくはしたれ共。夫は兄御と談合して。商ひの尾は見せぬいな。小春様の方は急な事。ソレ其小判五十両と。残はわしが」とかい立て</p>	<p>「サア此金は岩国の仕切金に。才覚はしたれ共。身請の方は急な事。ソレ其小判五十両と。（紙屋八ウ）残りわしが」とかい立て。明て取出す。染小袖羽織も交て郡内の。しまつして着ぬ浅黄裏。黒羽二重のいつてう</p>	<p>「サア此金の出所も。跡でかたればしれる事。此三十日に岩国の仕切銀にさいかくはしたれ共。それは兄御とだんかうして。あきなひの尾は見せぬ。小はるの方は急な事。夫其小判五十両と。のこりはわしが」とかい立て明</p>	<p>「其銀の出所も跡で語れば（紙屋五十二オ）ば知る事。此十七日岩国の紙の仕切銀に。才覚はしたれ共。夫は兄御と談合して。商売の尾は見せぬ。小春の方は急な事。そこに四々の壹貫六百目。今壹貫四百目」と。大引出しの。</p>	<p>「ヲ、夫々。たらずばわしが」とかい立て明て取出す百両の。兼て斯とはしら茶裏黒羽二重も色かへぬ。浅紫の糸目結。ひつた鹿の子も惜げなふ。子供のもかいあつめ「内ばに見ても三貫目。よもや借ぬといふ事は。な</p>	<p>「そのかねの出所も跡でかたればしれること。此十七日いわくこの紙のしきり銀にさいかくはしたれ共。それは兄ごとだんかうしてしやうはいのおは見せぬ。小はるの方はきうなことそこに四々の壹々六百匁。ま壹々四百</p>

<p>明て取出す染小袖。兼て斯とは白茶裏。黒羽二重も色かへぬ。浅紫の糸目結。ひつた鹿子も惜げなふ。子供の物もかい（紙屋ノ七才）集め。「内端に見ても甘両。よもや借ぬといふ事はない」物迄も有顔に。夫の恥と我義理を一つに包。風呂敷の内</p>	<p>ら。定紋丸に鶯の葉の退も。のかれもせぬ中は。内裸でも外錦男。かざりの小袖（紙屋九才）迄。「さらへて物数十五色。内端に見ても甘両。よもや借ぬいふ事はない」物迄も有顔に。夫の恥と我義理を一つに包風呂敷の内に。涙ぞ籠りける。</p>	<p>て取出すそめ小そで。かねてかふとはしらちやうら。くろはぶたへもいろかへぬ。浅むらさきのいとめゆひ。ひつた鹿の子もおしげなふ。子供の物もかい（紙屋上四ウ）あつめ。「内ばに見ても甘両。よもやかさぬといふ事はない」物迄も有顔に。おつとはぢと我ぎりをひとつにつゝむ。ふろしきの中になさげぞ。こもりける。</p>	<p>錠明て。簞笥をひらりととび八丈。京縮緬のあすはない。夫の命白茶裏。娘のお末が両面の。紅絹の小袖に身をこがす。手をまげては勘太郎が。羽織も交て郡内の。始末して着ぬ浅黄裏黒羽二重の葉の。退も退れもせぬ中は。内はだかでも外錦おとこ。かざりの小袖迄さ。らへて物数十五色。「内ばに取て新銀三百四五十目。よもやかさぬ（紙屋五十二ウ）といふ事はない」物迄も有顔に。夫の恥と我義理をひとつにつゝむ。風呂敷の中に。情をこめにける。</p>	<p>い」物迄も有顔に。夫の恥と我義理をひとつに包む風呂敷の中に情ぞ。こもりける。</p>	<p>「わたりや子供は何着いでも。兎角男は世間が大事。身請し（今織三十六ウ）て太兵衛とやらに一分立てて見へど諾も涙声。「請出して困ふて置か。内へ入るにしてからが。そなたは何と云さして打しほるれば「何のいな。必案じて下さんすな。子供」の乳母か飯焚か。面倒ながら真実の妹持たと思ふぞ」と。いふも胸迄突か</p>
<p>G 「私や子供は何着いでもとかく男は世間が大事。身うけてあの太兵衛めに。一分立て下さんせ」といへどいらへも涙声。「ラ、過分なぞや。カ手附渡して取（紙屋ノ七ウ）留請出して困て置か。内へ入るにしてからが。マそなたは何と」云さして打しほるれば。「ア、何のいな。必案じて下さんすな。ハテモ子供の乳母か。飯たきか。面倒</p>	<p>「私や子供は何着いでもとかく男は世間が大事。（紙屋九ウ）身請して太兵衛めに。一分立て下さんせ。「エ、過分なぞや忝い手附渡して取留。請出して困ふて置か。内へ入るにしてからが。そなたは何とせふぞいのふ。」ア、何のいな。必案じて下さんすな。ハテモ子供の乳（紙屋十才）母か。飯焚か面倒ながら真実の妹。く。く。持た</p>	<p>「私や子供は何着いでもとかく男は世間が大事。身受してアノ太兵衛めに一ぶん立て下さんせ」といへどいらへも涙ごへ。「ラ、くはぶんなぞや。手附渡して取とめ。受出してかこふておくか。内へ入るにしてからが。そなたは何と」いひさして打しほるれば「何のいな。かならずあんじて（紙屋上五才）くださんすな。ハテモ子供のうば</p>	<p>「わたしや子供は何着いでも。男は世間が大事。請出して小春も助け。太兵衛とやらに一分立てて見せて下さんせ」と。いへ共始終指真き。しくく泣て居たりしが。「手付渡してとりとめ。請出して其後。困ふて置か内へ入るゝにしてから。そなたは何と成ことぞ」と。いはれてはつと行当り。「アッアそふじや。ハテ何とせふ子供の乳母か。飯</p>	<p>「わたしや子供は何着いでも。兎角男は世間が大事。身請し（今織三十六ウ）て太兵衛とやらに一分立て下さんせ」と。いへど諾も涙声。「請出して困ふて置か。内へ入るにしてからが。そなたは何と云さして打しほるれば「何のいな。必案じて下さんすな。子供」の乳母か飯焚か。面倒ながら真実の妹持たと思ふぞ」と。いふも胸迄突か</p>	<p>「わたしや子供は何着いでも男はせけんが大事。請出して小はるもたすけ。太兵衛とやらに一ぶんたてて見せてくださんせ」と。いへ共しぢうさし（紙二十七才）うつむきしくく泣てあたりしが。「手付渡してとりとめ請出して其後。かこふて置か内へ入るゝにしてから。そなたは何と成ことぞ」といはれてはつと行あたり。「アッアそうじや。</p>

たわしじや。斯云事なら。なぜにおれにも云て下されぬ。お前の着物は質に置しやんせふと。坊様やお末様の着物計は。マァ待て下さんせ」と。こてくく明る半がいの。「コレ(紙屋十一ウ)此布子は一昨年の仕着せ。単物帷子も有。こいつは隠居のお家様に貰ふた京島の袷羽織。あたらしい革足袋一足。たつた一度した紅木綿の禪も有ぞへ。又日外新地で旦那様が。コリヤ三五郎よ。小(紙屋十二オ)春が事をおさんにいふなて。下んしたこま銀二匁八分。金がたらにや何ぼでも有ぞへ。是も足にして。ほん様の物は質に置いて下さんすな。エ、隠居の五左衛門様が。小胴欲に呵らしやんすを。お家様が影へなり。(紙屋十二ウ)日南になり。夫はくきつい苦勞。必悪ふ思はしやんすなへ。斯云や連小春様を。思ひ切んせじやない。一夜さは小春様。又一夜はおさん様と。まんべんに廻つて。今の所の片荷づらぬ様に頼ます。ぼん様がおさん(紙屋十三オ)様に抱れて寝て。夜さり目が明と三五郎よ。と、様が見へぬ。と、様呼で来てくれと。

I	
<p>「治兵衛殿お宿（紙屋ノハ ウ）にか」と。門口はい る五左衛門。「ヲ、是はし たり舅殿。」「マよふ御出 も夫婦はうぢく。三五 郎が背負たる。風呂敷見 付て。「コリヤあほうめ。」</p>	<p>せがましやる時は。此寝 ごいわしの目が。皿の様 に成て。泣てばつかり。 居まする」と。しやくり 上たる正直涙。異見（紙 屋十三ウ）はあほうの鏡也 「ヲ、馴染よふ云てくれ た。シタガそちが物は質に 置いでも。最こちらで有 程に。そりや取置てくれ。」 「エ、なぜにそふ云んす。 コリヤおれを侮らしやるか いのぼん様の物は何ぼで もやらぬ。まだ此（紙屋 十四ウ）着て居る物も脱 と。帯解かゝれば。「コレ く三五郎。成程吾儕の が尤じや。治兵衛様よく くぼんを可愛いと思や こそ。あれが身体有たけ。 足てくれた志。一緒にや つたがよござんす。」「ヲ、 そんなら皆借ほどに。（紙 屋十四ウ）サ、泣ずと機嫌 直してくれ。泣なく」と とふいてやる。涙斑の すけ顔如在なく仕 着せの衣装。風呂敷取出 し押包。「ドリヤわつさり と質置てこふ。旦那様ご んせ」と出る門口。</p>
<p>「治兵衛内にお居（紙屋十 五オ）やるか」と。ずつ とはいる五左衛門。「ヤ あほうめ。風呂敷拵げて とこへうせる。」「ハイく く此包には段々様子 が。」「又馬鹿つくしお</p>	<p>「次兵衛殿おやどにか」 と。門口はいる五左衛 門。「ヲ、コレハしたりし うと殿。」「マよふ御出」 もふうふはうぢく。三 五郎がせおふたる。ふる しき取てふみとばし。</p>
<p>「治兵衛は内にお居やる か」と。毛頭巾取て入を 見れば。なむ三宝舅五左 衛門。「是は扱。おりも 折よふお帰りなされた」 と夫婦は。転倒狼狽る。 （紙屋五十三ウ）</p>	<p>「次兵衛殿お宿にか」と。 門口這入五左衛門。「コレハ したり舅殿。」「よふマア お出」も夫婦はうぢく。 三五郎が背負たる風呂敷 取て踏飛し。</p>
<p>「治兵衛は内においやる か」（紙二十八オ）とけづ きん取て入を見れば。な む三ぼうしうと五左衛門 「是は扱。おりもおりよ ふお帰りなされた」と夫 婦はてんどどうろたゆる。</p>	<p>「次兵衛殿お宿にか」と。 門口這入五左衛門。「コレハ したり舅殿。」「よふマア お出」も夫婦はうぢく。 三五郎が背負たる風呂敷 取て踏飛し。</p>
<p>「治兵衛は内においやる か」（紙二十八オ）とけづ きん取て入を見れば。な む三ぼうしうと五左衛門 「是は扱。おりもおりよ ふお帰りなされた」と夫 婦はてんどどうろたゆる。</p>	<p>「治兵衛は内においやる か」（紙二十八オ）とけづ きん取て入を見れば。な む三ぼうしうと五左衛門 「是は扱。おりもおりよ ふお帰りなされた」と夫 婦はてんどどうろたゆる。</p>

<p>其包をどこへ持て行。又質屋へうせるのか。こつちへおこせ」と引たくられ。ひつくり拍子抜参りの。首に知たる心地なり。</p>	<p>る。じたいうぬが合点の行ぬたわけめ」と。睨み廻せば夫婦は吐胸。うちくく(紙屋十五ウ)もぢり拍子抜参りの。首に知たる心地也。</p>	<p>三五郎が負たる風呂敷もぎ取てどつかと居りとが声。</p>	<p>三五郎がおふたるふろしきもぎ取てどつかとすはりとなり。</p>
<p>J 「大方斯で有ふと思ふたはい。着(紙屋ノ九オ)類着そけを質にまげて。お山狂ひに仕上るのじやな。コリヤヤイ。女郎の誠とな。鬼瓦の笑ひ顔とはない物じやぞよ。サア手短におさんにひまやりや。女の子は母へ付が世界の大法。お末はさつきに連れていんだはい。ハ、ハ、ハ。又今祖母が戻りコレ。此誓紙をひけらかして渡した。ア、糸らい様でも(紙屋ノ九ウ)どごぞが女。こんなで性のじやないぞよ。せいしの代りに去状書。あんだらくさい」と引さきく。治兵衛が顔へ打付て。お上にどつさり大曰なり。</p>	<p>「大方斯で有ふと思ふたはい着類着そけを質にまげて。色狂ひに仕上るのじやな。コリヤヤイ。娘の誠と鬼瓦の笑ひ顔とはない物じや(紙屋十六オ)そよ。サア手短におさんは隙やりや。女の子は母親へ付が世界の大法。お末はさつきに連れて逝だ。又今祖母が戻り。コレ此誓紙をひけらかして渡した。ヤこんなで性のじやないぞよ。あほうめ其風呂敷(紙屋十六ウ)爰へおこしおれ。」「エイ是はアノ。」「きりくく持てうせふ」「ア、イ夫はサ。」「サア治兵衛。誓紙の代りに去状かけ」と。</p>	<p>「めらう下につからふ。賀殿。是は珍しい。上下着かざり脇指羽織。適よい衆の金つかひ。紙屋とは見へぬ。新地へお出か御精が出来ます。内の女房いらぬ物。おさんに隙やりや。連に来た」と口針有苦しい顔。治兵衛はとかふの言句も出す。「とつさま。けふはさむいによふあるかしやんす。先お茶一つ」と茶碗をしほに立寄て。「ぬしの新地通ひも。最前母様孫右衛門様お出なされて。段々の御異見。あつ涙を流し。誓紙を書いての発起心。母様に渡されしがまだ御覧なされぬか。」「ア、誓紙とは此事か」と。懐中より取出し。「あほう狂ひする者の起請(紙屋五十四オ)誓紙は方々先々。書出し程書ちらす。合点いかぬと思ひく。来れば。案のごとく。此ぎまでも梵天帝釈か。此手間で去状かけ」と。ずんくんに引さいて投捨たり。</p>	<p>「めらう下につからふ。むこの是はめつらしい上下きかざり。わきざしはおりあつはれよいしゆのかねつかひ。紙屋とは見へぬ。しんちへ御出か御せいが出来ます。内の女房いらぬ物おさんに隙やりや。つれに来た」と口には有りながい顔。治兵衛はとかふのごんくも出ず。「とつさまけふはさむいによふあるか(紙二十八ウ)しやんす。先おちや一ツ」とちやわんをしほに立よつて。「ぬしの新地通ひも。さいせんは、様孫右衛門様お出なされて。だんくくの御あけんあつ涙をながし。せいしをかいてのほつきしん。母様に渡されしがまだ御らんなされぬか。」「ア、せいしとは此ことか」とくはい中より取出し。「あほうぐるひする者のきしやうせいしは方々先々。かき出し程かきちらす。がてんいかぬと思ひく。来ればあんのことく。此ぎまでもぼん天た</p>

<p>K</p>	<p>おさんは聞兼「コレ爺様。ソリヤお前聞へませぬはいなく。こちの内の身体の衰へたのも皆お前から起つた事。ないもせぬ銀山にかゝつたといふて。(紙屋ノ十オ)三十兩借五十兩借。あげくには其銀山がつぶれたとやら。元も子もない様にして仕廻しやんしたぞや。男気な治兵衛殿。舅の事なり云出せはこつちも恥と。証文も残らず戻し。済さしやんした其時には。コレ此剛い顔にこぼして。おれが為の氏神様じやと。悦ばしやんした事をおまへ(紙屋ノ十ウ)よもや忘れはさしやんすまいがの。又主の悪所通ひも。元の発りはこな様から起つた事。れつきと仕分て貰ふ身体。『マ何して金が減たぞ』と。本家の不審が立た時。『ハテ舅殿に取れました』と。鼻毛らしう云れもせずと。口へ出して云こそさつしやらね。志を推量して。初手の間の(紙屋ノ十オ)茶屋通ひは。世間へ聞へにもさつしやる事かとほんにやれく。行しやる度々にわしやコレ</p>	<p>(ナシ)</p>	
<p>おさんは聞かねそばに寄。むなぐら取てこへふるはし「エ、コレと、様。ソリヤおまへ聞へませぬはいなく。こちの内のしんだいの。おとろへ(紙屋上六ウ)たのも。みなおまへからおこつた事。ないもせぬ銀山にかゝつたといふて。三十兩かり五十兩かり。あげくには其銀山が。つぶれたとやら元も子もない様にして仕まはしやんしたぞや。男気な次兵衛殿。しうとの事也公事みやすればこつちもはぢと。証文ものこらずもどしすまさしやんした其時には。コレ。此こはい顔に涙をこぼして。おれがための氏神様じやと。悦ばしやんした事をおまへ。よもやわすれはさしやんすまいがの。(紙屋上七オ)又ぬしのあく所かよひも。元のおこりはこなさんからおこつた事。れつきと仕分てもらふたしんだい。『何して金がへつたぞ』と。本家のふしんが立た時。『しうと殿に取れた』と。はなげらしういはれもせず。道具落に成分じやと。口へ出していひこ</p>	<p>(ナシ)</p>	<p>(ナシ)</p>	
<p>おさんは聞兼傍に寄胸ぐら取て声ふるはし。「エ、コレ(今織二十七ウ)爺様聞へませぬ。元こちの人の身体。衰へたのも皆お前から起つた事。ないもせぬ銀山にかゝつたといふて。五貫目かり七貫目かり。あげくには其銀山が潰れたとやら。元も子もない様にして仕廻しやんしたぞや。男気な次兵衛殿。舅の事也公事みやすればこつちも恥。本家へ聞へても悪いといふて。証文も残らず戻し済さしやんした其時はコレ。此こはい顔に涙をこぼして。おれが為の氏神様じやと。悦ばしやんした事忘れはさしやんすまいがの。又主の悪所通ひもれつきと仕わけて囃ふた身体。何して金が減たぞと本家の不審が立た時。舅大夫に取れたと鼻毛らしういはれもせず。道具落しにする事じやと。口出して云こそさつしやれね。(今織三十八オ)心さしを推量してほんにく初手の間は。茶屋へ行しやる度々にわしやコレ。後から拜んで居たはいな。其大恩を忘れあほ</p>	<p>(ナシ)</p>	<p>いしやくか。此手間でさり扶かけ」とずんくに引さいてなげ捨たり。</p>	

L	M
<p>後ろから。拜んで居たはいなく。其大恩を打忘れ。あほうじやのイヤたわけのと。仮初にも勿体ないこらへて下されちの人。と、様逝で下さんせ」と宥つ呵つ両方へ。我身一つのせつなさつらさ思ひ。やられて(紙屋ノ十一ウ)道理なり。</p>	<p>とはしらずして治兵衛は手をつき。「御立腹の段は御尤。カおさんが申は皆むだ事。私心に存せぬ事。此儘添せて下され」と。詫れど聞ず「イヤならぬ(紙屋ノ十二オ)はい。何にもいふ事聞事ないはい。おさん戻せば事は済。併。拵へおこせし道具衣装。改めて封付ん」と。立上ればおさんは驚。「エ、コレと、様。衣装道具も揃ふて有。改めるには及ばぬ」と。か</p>
<p>そさつしやらね。心ざしをすいりやうして。しよての間のちや屋がよひは。ほんにやれ。行しやる度々にわしやコレ。後からおがんでいたはいなく。其大おんを打わすれあほうじやのたわけ(紙屋上七ウ)のと。かりそめにももつたない。こらへてくだされちの人。と、様いんでくださんせ」となだめつ。しかりつ両ほうへ。我身一つのせつなさつらさ思ひ。やられてだうりなり。</p>	<p>(ナシ)</p>
<p>うじやのたはけのと。仮初にも勿体ない。こらへて下されちの人。と、様逝で下さんせ」と。宥めつ呵りつ両方へ我身一つにせつなさつらさ思ひやられて道理也。</p>	<p>(ナシ)</p>
<p>夫婦はあつと顔見合せ軋れて。詞もなかりしが。治兵衛手をつき頭を下。「御立腹の段尤共お詫申は以前の事。今日の只今より何事も慈非と思し召。おさんに添せて下されかし。たとへば治兵衛こつじき非人の身と成。諸人の箸の余りにて。身命は繋ぐ共。おさんは急度上に居うめ見せずつらいめさせず。添ねばならぬ大恩有。其訳は月日も立私の勤かた。身上持</p>	<p>(ナシ)</p>
<p>夫婦はあつとかほ見合せあきれて。詞もなかりしが。(紙二十九オ)治兵衛手をつきかうべをさげ。「御立腹の段尤共おわび申はいせんのこと。今日のた、今より何こともじひと思召。おさんにそはせて下されかし。たとへば治兵衛こつじきひにんの身となり。諸人の箸の余りにてしみやうはつなぐ共。おさんはきつと上にすへうめ見せずつらいめさせ</p>	<p>(ナシ)</p>
<p>「アイヤ。おさんが申はみなむだ事。私心にぞんぜぬ事。たゞ何事も御りやうけん。此ま、そはせてくだされ」と。わぶるを聞ず「イヤならぬ。何にもいふ事聞事ない。おさん戻せば事は済。併。拵へおこせし道具衣装。改めて封付ん」と。立上ればおさんは驚。「エ、コレと、様。衣装道具も揃ふて有。改めるには及ばぬ」と。か</p>	<p>(ナシ)</p>

けふさがれば突とばし。ぐつと引出し「コリヤどふじや」と。一重二重引出しの数も有たけ押入迄。底をたゝいて五左衛門口（紙屋ノ十二ウ）あんごりと明人物指にもさゝれず詞さへしばし。軻れて居たりける。

及ばぬ」と。かけふさがれば突飛し。ぐつと引出し「コリヤどふじや」と。軻れる口も明簾箒。「まだしも爰か」と上戸棚戸を引明れば内には小春ハツと計に氣をもむおさん。治兵衛（紙屋十八オ）はびつしやり戸を引立

かけふさがればつきとはし。ぐつと引出し「コリヤどふじや」と。あきれる口も。明たんす。「まだしもこゝか」と上戸だな。戸を引明れば内には小はる。次兵衛はびつくりしうとを引のけ戸をびつしやり。ハットおさんはさしうつむき。むねをいためるばかりなり。

直しお目にかくればはるゝ事。夫迄は目をふさいで。おさんに添せて給はれ」と。（紙屋五十四ウ）はらゝ。こぼす。血の涙畳に。くひ付侘びければ。「非人の女房には猶ならぬ。去状かけゝ。おさんが持参の道具衣類。数改めて封印付んと。立寄ば女房あはて。「着物の数は揃ふて有。改むるに及ばぬ」と。かけふさがればつきのけてくつと引出し。「こりやどふじや。」又引出してもちんからり。有たけこたけ引出しても。つぎ切壺尺あらばこそ。葛籠長持衣裳櫃。「是程空になつたか」と舅は怒りの目玉も居り。夫婦が心は今更に明て悔しき浦島の。巨燵蒲団に身を寄て。火にも入たき風情なり。「此風呂敷も気づかひ」と。引ほどき取ちらし。「さればこそゝ。是も質（紙屋五十五オ）屋へ飛すのか。ヤイ治兵衛。女房子供の身のかははぎ。其金でおやま狂ひ。生どふずりめ。女房共伯母甥なれど此五左衛門とはあかの他人。損をせふよしみがない。孫右衛門に断兄が方から取かへす。サア去状。ゝ」と

「まだしも爰か」と上戸棚。戸を引明れば内には小春。次兵衛は悔り舅を引退。びつしやり

ず。そはねばならぬ大恩有。其わけは月日も立私をつとめかたしんしやう持なをし。おめにかくればはるゝことそれ迄はめをふさいで。おさんにそはせて給はれ」とはらゝ。こぼす血の涙たゝみに。くひ付わひければ。「ひ（紙二十九ウ）にんの女房には猶ならぬさり状かけゝ。おさんが持参の道具いるい数あらためてふう付ん」と。立よれば女房あはて「きる物の数はそらふて有。あらたむるに及ばぬ」とかけふさがればつきのけくつと引出し。「コリヤどうじや。」又引出してもちんからり有たけこたけ引出しても。つぎぎれ一尺あらばこそつゞら長持いやうびつ。「是程から成つたか」としうとはいかりのめだまもすはり。夫婦が心は今更にあけてくやしき浦島の。こたつふとんに身をよせて火にも入たき風情なり。「此ふろしきも気づ（紙三十オ）かい」と引ほどき取ちらし。「さればこそゝ。是もしちやへとはすのか。ヤイ治兵衛女房子共の身のかははぎ。其かねでおやまぐるひ。いけどうすりめ女房共はお

<p>N</p>	<p>治兵衛とつくと心を定。 「コレ舅殿。此五十両は女房おさんが着衣装道具の代り。不足には有ふが持てござれ。」「エ、ヲ、そふはかい。イヤ又どふいふても大身体じや。ガあのだらを見るからは。いよ／＼娘は連れて逝。サア／＼うせふ」と引（紙屋ノ十三オ）立れば。 「モあ、いひ出しては聞ぬと、様。私しやマア帰ります。いふ迄はないけれど。勘太郎が事／＼を頼まずぞへ。朝飯前に忘れずとソレ。桑山の丸子／＼吞して下さんせ。」 「ヲ、氣遣ひ仕やんな。マ思ひも寄ぬ今此時宜。とんと心も落付ねど。そんなら暫く別れて居よ。舅殿も娘の事。まん（紙屋ノ十三オ）ざらむごふもさつしやるまい。ツイ戻りやる様になるぞいの。」 「アイコレ治兵衛様。必短氣の出ぬ様に。」「エ、小面倒な暇乞。きり／＼歩</p>	<p>「ヤ申親父様。此五十両は女房おさんが着衣装道具のかはり。不足にはござりませふが。どうそこれ御了簡。」「ヲ、そふはかい。イヤ又どふいふても大身体じや。ハテ結構な寝道具じや（紙屋十八オ）なア。ガあの寝道具を見るからはいよ娘はつれていぬ。サア／＼おさん。きり／＼戻れ。」「アイ。」 「何泣事が有ぞい。サア早ふ。」「アイ治兵衛様わたしやまあ帰ります。いふ迄はないけれど勘太郎が事を。頼まずぞへ。」 「ヲ、氣（紙屋十九オ）遣ひ仕やるな。マ思ひもよらぬ今此時宜。とんと心も落付ねど。そんなら暫く別れて居よ。」 「コレ申。必短氣の出ぬ様に。」 「エ、小面倒な暇乞。きり／＼戻れ」と引立る。「噂のふ／＼」を聞程に跡に。見捨る子を捨る。（紙屋十九オ）藪に夫婦の二股竹長き。別れと出て行。</p>	<p>治兵衛とつくと心を定め。「コレしうと殿。此五十両は女房おさんが。着ぬしやう道具のかはり。（紙屋十八オ）ふそくには有ふがもつてござれ。」 「エ、ヲ、そふはかい。イヤ又どふいふても大しんだいじや。ハテけつかなねだうぐじやな。ガアノねだうぐを見るからはいよ／＼むすめはつれていぬ。サア／＼うせふ」と引立れば。「ア、いひ出しては聞ぬと、様。わたしやマアかへります。いふまではないけれど。勘太郎が事をたのみます。あさぶさまへにわすれずと。ソレくは山のまきてくださんせへ。」 「ヲ、きづかひ仕やんな。マ思ひもよらぬ今此時しんと（紙屋十九オ）心もおち付ねど。そんならしはらくわかれてゐよ。しうと殿もむすめの事。まんざらむごふもさつしやるまい。ツイも</p>	<p>「ヲ、治兵衛が去状筆では書ぬ是御覽せ。おさんさらば」と脇指に手をかする。縋り付て「なふ悲しやとつさま。身に誤り有ばこそだん／＼の詫言。余り利運過ました。治兵衛殿こそ他人なれ。アレ子供は孫。可愛はござらぬか。わしや去状は請取ぬ」と。夫に抱付声を上泣させ。ぶこそ道理なれ。「よい／＼（紙屋十五オ）去状入ぬ。めらうめこい」と引立る。「いやわしやいかぬ。飽も飽れもせぬ中を。何の恨に昼日中。女夫の恥はさらさぬ」と。泣詫れ共聞入ず。「此上に何の恥町内一ぱい喚ていく」と。引立ればふり放し小腕取れよろ／＼と。よろめく足のつま先にかはいやはた目をさまし。「大事の母様なせ連て行祖父様め。」 「今から誰と寝よふぞ」と。慕歎けば「ヲ、いと</p>	<p>七重の戸びら八重のくさり。百重のかこみは遁る、共。遁れ。がたなき手詰の段。</p>
<p>とたんに投出す百両。 「女房おさんが着衣装道具。不足には有ふが持てござれ。」 「ヲ、そふはかい。又／＼どふいふても大身体。ハテ結構な寝道具しやな。アノ寝道具を見るからは。弥娘を連れて逝る。サアうせおらふ」と引立れば。「あ、云出しては聞ぬ爺様。わたしやも帰ります。必々未来は夫婦でござんすぞへ。云迄はないけれど。勘太郎が事を頼まず。」 「ハテ舅殿じやといふて娘の事。とつくりと思案さつしやつたら。まんざらむごふもさつしやるまい。又戻りやる様になるふぞいの。」 「必短氣の出ぬ様に。」 「エ、小面倒くさい暇乞。歩みさらせ」と引立る。声に目覚す勘太郎。「か、様のふ」と縋り付。孫の愛にもおぼれぬ邪見。「エ、（今織三十九オ）面倒な」と踏飛され。わつと泣子を沖の石</p>	<p>「ヲ、治兵衛が去状筆では書ぬ是御覽せ。おさんさらば」と脇指に手をかする。縋り付て「なふ悲しやとつさま。身に誤り有ばこそだん／＼の詫言。余り利運過ました。治兵衛殿こそ他人なれ。アレ子供は孫。可愛はござらぬか。わしや去状は請取ぬ」と。夫に抱付声を上泣させ。ぶこそ道理なれ。「よい／＼（紙屋十五オ）去状入ぬ。めらうめこい」と引立る。「いやわしやいかぬ。飽も飽れもせぬ中を。何の恨に昼日中。女夫の恥はさらさぬ」と。泣詫れ共聞入ず。「此上に何の恥町内一ぱい喚ていく」と。引立ればふり放し小腕取れよろ／＼と。よろめく足のつま先にかはいやはた目をさまし。「大事の母様なせ連て行祖父様め。」 「今から誰と寝よふぞ」と。慕歎けば「ヲ、いと</p>	<p>とたんに投出す百両。 「女房おさんが着衣装道具。不足には有ふが持てござれ。」 「ヲ、そふはかい。又／＼どふいふても大身体。ハテ結構な寝道具しやな。アノ寝道具を見るからは。弥娘を連れて逝る。サアうせおらふ」と引立れば。「あ、云出しては聞ぬ爺様。わたしやも帰ります。必々未来は夫婦でござんすぞへ。云迄はないけれど。勘太郎が事を頼まず。」 「ハテ舅殿じやといふて娘の事。とつくりと思案さつしやつたら。まんざらむごふもさつしやるまい。又戻りやる様になるふぞいの。」 「必短氣の出ぬ様に。」 「エ、小面倒くさい暇乞。歩みさらせ」と引立る。声に目覚す勘太郎。「か、様のふ」と縋り付。孫の愛にもおぼれぬ邪見。「エ、（今織三十九オ）面倒な」と踏飛され。わつと泣子を沖の石</p>	<p>「ヲ、治兵衛が去状筆では書ぬ是御覽せ。おさんさらば」と脇指に手をかする。縋り付て「なふ悲しやとつさま。身に誤り有ばこそだん／＼の詫言。余り利運過ました。治兵衛殿こそ他人なれ。アレ子供は孫。可愛はござらぬか。わしや去状は請取ぬ」と。夫に抱付声を上泣させ。ぶこそ道理なれ。「よい／＼（紙屋十五オ）去状入ぬ。めらうめこい」と引立る。「いやわしやいかぬ。飽も飽れもせぬ中を。何の恨に昼日中。女夫の恥はさらさぬ」と。泣詫れ共聞入ず。「此上に何の恥町内一ぱい喚ていく」と。引立ればふり放し小がいはいわけいていく」と。ひつ立ればふりはなし小がいなとられよろ／＼と。よろめく足のつまさきにはいやはたと行あたる。二人の子共がめをさまし。（紙卅一オ）「だいい</p>	<p>とたんに投出す百両。 「女房おさんが着衣装道具。不足には有ふが持てござれ。」 「ヲ、そふはかい。又／＼どふいふても大身体。ハテ結構な寝道具しやな。アノ寝道具を見るからは。弥娘を連れて逝る。サアうせおらふ」と引立れば。「あ、云出しては聞ぬ爺様。わたしやも帰ります。必々未来は夫婦でござんすぞへ。云迄はないけれど。勘太郎が事を頼まず。」 「ハテ舅殿じやといふて娘の事。とつくりと思案さつしやつたら。まんざらむごふもさつしやるまい。又戻りやる様になるふぞいの。」 「必短氣の出ぬ様に。」 「エ、小面倒くさい暇乞。歩みさらせ」と引立る。声に目覚す勘太郎。「か、様のふ」と縋り付。孫の愛にもおぼれぬ邪見。「エ、（今織三十九オ）面倒な」と踏飛され。わつと泣子を沖の石</p>	<p>「ヲ、治兵衛が去状筆では書ぬ是御らんせ。おさんさらば」とわきざしに手をかくるすかり付て「なふ悲しや。とつ様身にあやまりあればこそ（紙三十ウ）だん／＼のわびごと。あんまりうん過ました。治兵衛殿こそ他人なれ子供は孫か。ゆふはござらぬか。わしやさり状はうけとらぬ」と。夫にだき付声を上泣させ。ぶこそ道理なれ。「よい／＼さり状いらぬめらうめこい」と引立る。「いやわしやいかぬ。あきもあかれもせぬ中を。何の恨にひる日中めをとの恥はさらさぬ」と泣わふれ共聞入ず。「此上になんか恥町内一ぱいわけいていく」と。ひつ立ればふりはなし小がいはいわけいていく」と。よろめく足のつまさきにはいやはたと行あたる。二人の子共がめをさまし。（紙卅一オ）「だいい</p>

め」と引立る。声に目覚す勘太郎。「か、様のふく」を聞捨に跡に。見捨る子を捨る。藪に夫婦の二股竹長き。別れと出て行。

0
としや遅しとかけ入る小春。「ヤアそなたは爰へ(紙屋ノ十四才)どふして」と。尋る内にも稚子が。「鼻様のふ」としたふ子を。見るに二人はいとゞ猶。思ひくづをれ抱しめすかせばすや。稚子を。いぶりながらもくどき言。「何からいほふぞ治兵衛様。日外も曾根崎で。愛相づかしな悲しいお別れ。思ひ切ては居るけれど。太兵衛に身請しられては。所詮生ては居ぬ覚悟。此(紙屋ノ十四才)世の名残にたつた一目と。来事は来ても折悪く。立聞した内の様子あれ程貞女なおさん様に。あふぎの別れさせますも。皆私からおこつたこと。堪忍して下さんせ

どりやるやうになるぞいの。「コレかならず。たんきの出ぬやうに。」「エ、小めんどうないまごい。きりくあゆめ」と引立る。こゑに目さます勘太郎。「か、様のふ」とすがり付。まごのあいにもおぼれぬじやけん。「エ、じやまくさい」とふみとばされ。わつとなく子を。おきの石しまがく。れして行すぐる。(紙屋上九了ウ)

(欠)

としや遅しとかけ出る小春。いだきかゝへる目は涙。「ヲ、道理じやくわいの。ドレくおぼが」となだむれど「いやじやくおぼいやじや。かゝ様の傍へ行たいわいの。かゝ様のふ」と慕ふ(紙屋廿才)子を。見るに二人はいとゞ猶。思ひくづおれいだきしめ。すかせばすや。稚子を。いぶりながらもくどき言。「治兵衛様。日外も曾根崎で。あいそづかしなかなしいお別れ。思ひ切ては居るけれど。(紙屋廿才)太兵衛に身請しられては。所詮生ては居ぬ覚悟。此世の名残にたつた一目と。来事は来ても敷居高く。閃かねしをおさん様。悋気ねたみの色も

しや。生れて一夜もかゝが肌を放さぬ物。晩からはとゞ様とね、仕や。二人の子供が朝ぶさまへ忘れず。必桑山飲せて下され。なふ悲しや」といひ捨る。跡に見捨る子を捨る。藪に夫婦の双股竹ながき。別れと。出て行。

治兵衛は我子を抱しめ。「か、は(紙屋五十六ノ六十才)追付戻るぞよ。だまつて寝よ」と叩き付偽の落付所向ふ北斗の剣先はとふで冥途の頬かぶり。「外へ来るは小春じやないか。」「治兵衛様か。嗚憎かつたでござんせふ。段々のいひわけ。」「何にもいやんな女房共に様子は聞た。生て居られぬ二人が身の上。」「そんならお前も。」「ヲ、覚悟はよいサアおじや」と。手を引連て

島隠れして行過る。

のかゝさまなせつれてゆくちいさまめ。「今からたれとねよふぞ」としたひなげ、ば「ヲ、いとしや。うまれて一夜もかゝがはだをはなさぬ物。ぱんからはとゞ様とね、しや。ふたりの子共が朝ふさまへわすれず。必くはやまのませてくだされ。なふ悲しや」といひすつるあとに見すつる子をする。やふにふうふのふたまたたけながき。わかれと(紙卅一ウ)

(ナシ)

としや遅しとかけ出る小春抱きかゝへる目は涙。「ヲ、道理じやく。今から伯母が」と抱寄共。「いやじやく。伯母はいやじやかゝ様の傍へ行たいわいの。聞ぬく」と泣わめけば。聞兼出る下女の玉。「ほんに泣子も目を明て物音も聞へぬ程に。小春様の最前から戸柵に忍んでござつた事。お咄しなざるゝ其間お宮へなりと連てい。コレ嗚様へ行ぞや」と。背に負身も泣催す目を押拭ひ出て行。跡に二人は。世の憂を思ひくつおれ涙ぐみ。暫し。詞もなかりしが。小春は漸顔を上。「ほんに何から云ふやら。いづぞやも山崎であいそ尽しな悲しいお別れ。思ひ

<p>P</p> <p>「高砂や此重箱に餅入て。」片言交りあほうの三五郎。机に乘し三つ具足両手に。抱へ二人が真中。「サア〜〜〜氣疎い物に成たじやないかへ。アノさつきにおゑ様のいはんすには『コリヤ三五郎よ。おれが留主に成たら大かた小（紙屋ノ十五ウ）春様がござんす程に。そふしたら旦那様と祝言さすのじや。我を頼』といふておかんしたはいな。そこでおれが思</p>	<p>く。」「真実な入訳を。聞ば聞程此身の誤り。あの様な女房が三千世界に有かいのふ。此云訳にはそなたも。おれも。」「スリヤこな様も（紙屋ノ十五ウ）覚悟極めて。エ、忝ふござんす」と抱しめたる。ないじやくり胸と。く〜に云せけり。</p>
<p>「小春様〜」と。呼立出る三五郎。「けふお家の云んすには。ひよつとおれが居ぬ間に小春様に逢たらば。此状を（紙屋廿二ウ）渡してくれといはんした故。禪にはさんで置た。ぬくもりのさめぬ内。ソレよんだり」と投出す文。としや遅しと押ひらく</p>	<p>なふ。段々の御深切。『首尾を見合せ逢してやろ』と。（紙屋廿一ウ）情深いお詞に。あまへ隠れる戸棚の内。是程貞女なおさん様に。あふきの別れさせますも。皆私から発る事。堪忍して下さんせ。」「おれに隠してそなた迄に。夫程心を尽す心底。あの様な女（紙屋廿一ウ）房が。三千世界にあろかいの。此云訳にはそなたもおれも。」「スリヤお前も覚悟は極めてゐる。エ、忝ふござんす。」「</p>
<p>(欠)</p>	
<p>(ナシ)</p>	
<p>「高砂や。此重箱に餅入て。」かた言交りあほうの三五郎。卓に乘し三具足両手にかゝへて二人が真中。「サア〜〜〜氣疎い物に成たじやないか。今朝なお前のごんてからお家様のいはんすにや。『コリヤ三五郎よ。後に二人に祝言さすのじや。われを頼む』といふて置ん（し。脱字）た。そこでおれが思ひ付。花瓶の松に鶴亀酒の取たがなかつたさかいでな。水を（今織四十</p>	<p>切ては居るけれど。太兵衛に身受しられては所詮生ては居ぬ覚悟。此世の名残にたつた一目と。来事は来ても鬨高く。（今織三十九ウ）這入兼しをおさん様。愠気妬の色もなふ。段々の御深切首尾を見合せ逢してやろと。情深いお詞に。あまへて隠れる戸棚の内。是程貞女なおさん様に。逢岐の別れさせますも皆私からおこる事。堪忍してくださんせ」と手を合すれば。治兵衛も涙。「あゝ心底の居つた女房。嫁入せいと云た逆抜て戻るは知た事。それ迄もなふそなたもおれも。」「へ、忝ふござんす」と。抱しめたる泣じやくり胸と。く〜に云せけり。</p>
<p>(ナシ)</p>	

ひ付。花瓶の松に鶴亀。酒の取たがなかつたさかいで。水を銚子に入て来た。媒役のおれ様じゃ。礼には好の虎屋まんぢうコレ。今からあほうと云んすなへ。サア、早ふのまんせ」と。(紙屋ノ十六才) いへど二人はいらへさへ。死ねばならぬしらせかと。かくごながらも今更に目もうろくと。成にける。

「ア、コレ泣んすないのじやの。」ハ、ア扱は嬉し涙さんがいはんす通り。嬉し涙が。こぼれたはいのふ。去ながら治兵衛様と祝言しては。どふもおさん様へ。「エ、なんの濟ぬ事はごんせぬはいの。お爺様は出し柄に成て。(紙屋ノ十六才) 是程味い鯉節をお前にやらんす事じや物志を無足にせずときり、吞でさ、んせいのふ。」ホコリヤ三五郎がいふ通り。祝言じやと思や義理も有。互に末期の水盃。「ムさらばお酌を申さふかい。」涙ながらに取上る。酒と。水とは土器の。土に成迄葬礼の。一本花や鶴亀の。蠟燭立も(紙屋ノ十七才) 消る身と思へば。いと、胸せまる。

オ) 銚子に入て来た。仲人役のおれ様じゃ。礼には好の虎屋饅頭。今からあほうと云んすなへ。サア、早ふ呑んせ」と。いへど二人は諾さへ「死ねばならぬ知せか」と。覚悟ながらも今更に目もうろくと。成にける。

「ア、泣んすないのじやの。」ハ、ア扱は嬉し涙さんがいはんす通り。嬉し涙が。こぼれたはいの。去ながら。次兵衛様と祝言してはおさん様へ。「何の濟ぬ事はごんせぬはいの。お家様は出しから成ての。是程高い鯉節をお前にやらんす事じや物。志を無足にせずときり、吞でさ、んせいの。」ホコリヤ三五郎がいふ通り。祝言じやと思や義理も有。互に末期の水盃。「さらばお酌を申さふかい。」涙ながらに。取上る酒と。水とは土器の。土に成迄葬礼の。一本花や鶴亀の。蠟燭立も消る身と思へば。いと、胸(今織四十五) せまる。「サア、目出たふ成て来た。エ、誰ぞ謡うたひがこいでなア」と。見やる外面へ四ツ子の。墨の衣に草鞋がけ。天下茶屋安養寺常念仏鉢。そりやこ

<p>Q</p> <p>「サア〜目出たふ成て来た。エ、誰ぞマア。謡うたひがこいでな」と見やる外面へ四ツ子の。墨の衣にわらぢがけ。「安養寺尼寺。常念仏はつち。」「ソリヤコソ来たは」とあほうはかけ出。 抱て這人を顔見て悔り。「ヤお末じやないか。わりや一人戻つたか。そふしてマアかはつた形をして。」「アイぢい様に（紙屋ノ十七ウ）こんな美しいべ、してもらふた。余り此べ、は白いによつて。何やらたんと書て下さつた。此書たのを。と、様や伯母様にちやつと見せてこいといふて。祖父様が門口迄。連て来て下さつたはいのふ。」「ヤア」と二人は立よつて。あたふた脱す墨染の。下には何か白無垢に。</p>	<p>おさんが筆のちらし書。『涙ながらに一筆しめし参らせ候。（紙屋ノ十八ウ）先程と、様連立帰られ候節。小春様御忍ばせの姿。慥に見受候へ共。御存の訳合故御目もじも成難く書残し申上参らせ候。とかく連合の命が助たさ。小春様へわりなきお願ひ申上候ひしに。御聞届給はる嬉しき。海山にもかへまほしく。何ぼ</p>
<p>おさんが筆のちらし書。『涙ながらに一筆しめし参らせ候。此程も申上し通り。（紙屋廿二ウ）つれ合の命が助けたさお前様へわりなきお願ひ。申上候らひしに。御聞届け給はる嬉しき。海山にもかへがたく。此御恩送り候には。お二人を御夫婦となしまいらせ候こなた事は是迄の縁とあきらめ。（紙屋廿三オ）親元へ</p>	<p>(欠)</p>
<p>おさんが筆のちらし書。『涙ながらに一筆しめし参らせ候。先程も申せし通り。連合の命が助けたさ。小春様へわりなきお願ひ（今織四十一オ）申上候ひしに。御聞届け給はる嬉しき。海山にもかへまほしく。何ぼう忝ふ存上参らせ候。此御恩を送り候には末々お二人を御夫婦となし参らせ候より外なく存候故。爺様と申</p>	<p>(ナシ)</p> <p>そ来たはと阿房は駈出。抱て這人を顔見て悔り。ヤアお末じやないか。わりや独戻つたな。そふしてかはつた形をして。」「アイ祖父様にこんな美しいべ、仕て貰ふた。『あんまり白ふて悪いによつて。書て有此ベッを。と、様やおば様にちやつと見せてこい』と云て。祖父様が門口迄連て来て下さつた。」「ヤア」と二人は立寄て。あたふた脱す墨染の。下には何か。白無垢に</p>

う忝ふ存上参らせ候。ア、此御恩を送り候には。末くお二人を御夫婦となし参らせ候。より外なく、(紙屋ノ十八ウ)存候其上と、様の真実を聞。我事は是迄の縁と諦め参らせ候。又お末事はこなた乳にて育申べく候。勘太郎が事を小春様へ。呉々頼上参らせ候。『エ、何の事じやぞいな。コリヤマア何の事じやぞいな。』「ソリヤ、聞へませぬはいなおさん様。わたしやお礼受る覚はない。是迄愒気妬もなふ。美しう逢して給はる。御恩を思ふて御頼を。(紙屋ノ十九ウ)聞入たのが械に成。こんな事に成たのは。義理に義理を重いと云ふ事でごんすかいな。申く治兵衛様いな。おさん様を呼戻して。千年も万年も添遂て下さんせなア。コレく申おさん様。コリヤ私をば術ながらすのかいな。私しや、よふ明らめて居る程にな。ちやつと戻つて下さんせな。コレナ治兵衛様いな。呼(紙屋ノ十九ウ)戻して下さんせ。くと立て見居て見。うろくと涙も涙に暮居たる。

帰り候儘。何とぞ勘太郎が事を。くれくも頼上。エ、何の事じやぞいな。ナニく『治兵衛様へも申入。』「ヤどれく。何我身のおふつかより斯成し御事を。自由がましくこなたより暇を乞申候段。御しかりの(紙屋廿三ウ)程恐れ入。申訳には娘のお末もろ共今日より尼に成。』「エ、おさん様が尼にならしやんとして。わたしや何とせふぞいな。ドレくくく『娘お末諸共。今日より尼に成。天下茶屋尼寺。安養寺へ身を片付る。心に極め(紙屋廿四ウ)まいらせ候。』皆迄読ずむせ返り「わつ」との声に目をさまし。「か、様のふく。くと身をあせる。二人も今はたへ兼て。いだきしめ抱しめて。『そりや聞へませぬおさん様。是迄愒気もなされずに逢して給はる其御(紙屋廿四ウ)恩。聞入たるが総に成こんな事なら来た時に。なぜそふ云ては下さんせぬ。コレナア申治兵衛様。おさん様を呼戻し。千年も万年も添遂て下さんせ。此子はかはゆふないかいな。見れば見る程いたいけな。愛にこぼるゝ稚子の乳(紙

合せけふしのごとく計ひ参らせ候。お末事は此方乳にて育み申べく候。勘太郎が事を小春様へくれく頼上参らせ候。』エ、是はまあ何の事じやぞいな。是迄愒気妬もなふ美しう逢して下さんした。御恩を思ふてお頼みを聞入たのがかせになり。こんな事になつたのは義理に義理を重いと云ふ事でごんすか。申く次兵衛様。おさん様を呼戻し。千年も万年も連添て下さんせいなア。」

R	<p>「ナニく『舅五左衛門申入候。』何アノ舅親父の恩しらずめ。うぬが何のろくな事書上る物じや〜。エ、何々『舅五左衛門申入候。六年以前あたはぬ銀山にかゝり御損失をかけ候所。賀舅の由縁を以て。証文残らず返しくだされ千万忝存じ』(紙屋ノ二十才)奉り候。金子の減少。本家への聞へを思し召。夫故の遊所通ひ。始の嘘が誠と成は我人若年の時を思ひ出し申候〜。先頃娘に右の入訊。委細に承知仕候故。輕少ながら金子百五十兩。先刻衣装相改候節。簞笥大引出しへ差入置申候。』エ、〜。ヲ、『右金子を以て。小春殿を請出し。』ヲ、コレ小春いの〜。『右(紙屋ノ二十才)金子をもつて。小春殿を請出し。長く御添下さるべく候。』エ、『娘さん事は。お末諸共今日尼にいたし。』ヲ、コレ小春いの〜。おさんが尼に成たといの。』エ、おさんが尼にならしやんとせうぞい</p>	<p>(ナシ)</p>	<p>屋廿五才)房放るゝいぢらしさ。孤となしたるも。皆わし故に起た事。堪忍して」と計にて。取乱したる詫涙。</p>
(欠)	(ナシ)	(ナシ)	(ナシ)
<p>『ナニく『五左衛門申入候。六年以前あたはぬ銀山にかゝり御損失をかけ候所。賀舅のよしみを以て証文残らず返し下(今織四十一才)され千万忝存じ奉り候。金子の減少本家の聞へを思し召夫故の遊所通ひ。始めの嘘が誠と成は我人若年の時を思ひ出し申候。先頃娘に右の入訊委細に承知仕候故。輕少ながら金子三百兩先刻着衣装相改候節。簞笥大引出しへ差入置き申候。右金子をもつて小春殿を請出し長く御添下さるべく候。娘事はお末諸共天下茶屋村安養寺にて今日尼に致し。貞玉智月と法名付。最前持帰り候百兩は二人の者の飯料。則寺へ祠堂に上申候。』皆迄読ず兩人はわつと計に声を上正気。たわいはなかりける。</p>	(ナシ)	(ナシ)	(ナシ)

T	S	
<p>折からうそく／＼善六太兵衛。門口ほそ目に「こりや見付た。ヤイ治兵衛め。おれがうけ出して女房にする小春。うぬは又何で引込だ。」「ア、コレ太兵衛さんこま言いふにや及</p>	<p>三五郎も目を摺て。「ア、く／＼テモ扱も哀れな悲しい。どゑらいうれい事にして退たはいのふ。けふ昼飯迄はけんによもなふ。美しう（紙屋ノ廿一ウ）髪結てゝ有たが。もふあさからはぐる／＼坊主。外の尼様とつれ立て。コレ此子も手を引れて。『安養寺。尼寺常念仏はつと』といふて歩かんすを見る様な。く／＼とあほう程猶哀れしる。二人はお末に取すがり声もやぶるゝ芭蕉葉に涙／＼の雨やさめはれ間もわかずふり（紙屋ノ廿二オ）しきる。</p>	<p>な。「テモおさんが尼に成たといのふ。く／＼。」 「エ、『娘さん事はおすへ諸共今日尼に致し。貞玉智月と法名付。（紙屋ノ廿一オ）天下茶屋尼寺安養寺へ連行。先刻下されし五十両は。二人の者の飯料。則寺へ祠堂に上申候』皆迄読ず兩人は「わつ」と計に声を上正気たわいはなかりける。</p>
<p>折からうそく／＼善六太兵衛。門口細目に。「コリヤ見付たぞ。ヤイ治兵衛め。おれが受出し女房にする小春。うぬは何で引込」（紙屋廿五ウ）「ア、コレ太兵衛様。細言いふには及</p>	<p>晴間も待す降しきる。</p>	
<p>(欠)</p>	<p>(欠)</p>	
<p>「行先は。大川筋の橋尽し三途の川の渡り初。たどり着たる彼岸は。南無あみ島の長寺。最期所」と観念し。早寺／＼の六ツの鐘。今ぞ此世の離れ際。既に刀を拔放</p>	<p>(ナシ)</p>	
<p>折から庭へ竹輿かき居。「申／＼小春様。揚先からせきに来るもふお帰り」と夕暮前。涙隠して立上り。「わしや揚先へ行程にな。手筈はいつものさの字きの字。」「イヤ</p>	<p>三五郎も目を摺て。「テモ扱も哀れな悲しい事を仕てのけた。けふ昼飯迄権輿もなふ美しう髪結てゝ有たが。最あしたからはぐる／＼坊主。菊石やちん（今織四十二オ）ばの尼と連立。コレ此子の手を引て。『天下茶屋安養寺常念仏。ハアチ』と云てあるかんすを見る様な」と阿房ながらも哀しる。二人はお末に取纏り。声も破るゝ芭蕉葉に涙々の雨やさめ晴間も。分ず降頻る。</p>	
<p>(ナシ)</p>	<p>(ナシ)</p>	

<p>ばぬ。是迄ちうく意趣有治兵衛め。ぶち殺して腹いよ」と。双方よりぶちかゝる。利腕つかんで(紙屋ノ廿二ウ)「コリヤく三五郎。小春に怪我をさせぬやう働けく。」「ラット任しよ」と箒の助太刀。あなたこなたをちらく。見る目あやうく気をひやす。いらつて打込善六太兵衛。折よくはづせば二人はどし打。「そりや治兵衛めが切おつた」と。わめけば是非なく乗かゝり。「日頃の意趣」と。とゞめの(紙屋ノ廿三了オ)かたな。</p> <p>「コリヤく三五郎く。お末を連て奥へゆけく。コレく小春く。ヲ、こはい事はないく。モ斯成上はぜひに及ばぬ。兼ていふ合せしごとく。最期所はあみ島の大長寺。人なき内にサアおじや」と手を取りそぐ悪縁の末は涙の種と成。心づくしの数々を書集めたる藻塩草嚙の種と成にけり(紙屋ノ廿三了ウ)</p>	<p>ばぬ。是迄重々意趣の有治兵衛め。ぶち殺して腹いよ」と。双方よりぶちかゝる。利腕つかんで「コリヤ三五郎。小春に怪我をさせぬ様。働けく。」「おつと心得してこいな。任せて置」と箒の助太刀。あなたこなたをちらく。見るも危ふく(紙屋廿六オ)気をひやす。いらつて打込善六太兵衛。折よくはづせば二人は同士打。「ソリヤ治兵衛めが切おつた」と。わめけばぜひなくのつかゝり。「日頃の意趣」ととゞめの刀。</p> <p>「コレ三五郎。勘太郎連て奥へく。もふ斯成上は。是非に及ばぬ。小春。サアおじや」といつさんに網島。さしてへいそぎ行(紙屋廿六ウ)</p>
<p>す。「ヤレ待く」と孫右衛門息をはかりに走り付。「二人ながら死るに及ばぬ。身すがら太兵衛(紙屋五十六ノ六十ウ)悪者共。贖金の工みお上へ露見し。五左衛門殿の疑ひも。はれてやつぱり躰。小春の身分の納りも。諸事我胸に有」明の空もしろく明渡る。日の出の芝居曾根崎に春から春の桜橋爰に絶せず栄へける(紙屋六十一了オ)</p>	
<p>コレ。最揚先へ行きやるに及ばぬ。五左衛門殿の志。「イエく。お前に請出されてはおさん様へ義理が立ぬ。やつぱり忍んで逢ます程に。必来て」と云たさを包と俱に乗移れば早昇出す駕籠の者。暫しの別れも千時ぞと。思ふ昔も今更に。泣て別るゝさぬくを。袖や袂に。夕告の鳥も。哀や。へ添ぬらん(今織四十二ウ)</p>	